

鯨と渡来人

1 問題提起

渡来人の問題は、日本の歴史文化の研究における重要なテーマである。渡来の事実については疑問の余地はないが、いつ、どこから渡来したのか、およびどのような人々が渡来したのかという点については、諸説が入り乱れ確定していない。

ただし稲作の伝来は、渡来人の問題を解く重要な手がかりになっており、稲作の起源は長江流域であることから、渡来人は中国・江南から日本列島に移住したということになり、渡来が始まった年代は、弥生時代前期あるいは縄文時代晩期であると一般に考えられている⁽¹⁾。

しかしながら、考古学のデータの不断の増加と考古学の不断の深化に伴い、少なくとも縄文前期後葉から縄文中期の段階に、日本列

張 從 軍

訳：岡部孝道

島に突如として、大陸文化との関係が極めて密接ないくつかの要素が現れたこと、特に入れ墨を特徴とする土偶が集中して東北・関東地方で発見されていることから、渡来人の歴史を改めて検討することが必要となってきた⁽²⁾。

稲作が伝来する以前にも、大陸の住民が日本列島に移住していた可能性がある。これらの人々は、主として黄河流域から渡来した人々であり、その顕著な特徴は入れ墨である、と考える。これは中国の中原で鯨^{げい}（入れ墨）の刑罰を受けて辺境に追放されたり、集団で逃亡した罪人である。彼らが日本列島に進入したルートは、三通りあったと考えられる。第一は、山東半島から朝鮮半島を経て直接関東地方に至るルートである。第二は、中国北方の黒竜江に沿って海に出て、樺太^{からふと}を経由して南下して北海道に入った後、さらに南下して関東に入るルートである。第三は、中国の東北地方から朝鮮半

島を経て、海を渡って関東・北陸地方に入るルートである。稲作時代の渡来人と異なり、縄文時代の渡来人が日本列島にもたらしたのは粉食文化とこれと結びついたシャーマニズムの文化である。

以下、中日両国の古代の入れ墨の歴史と考古学のデータについて触れ、早期の渡来人の歴史について簡単に探ってみたい。

2 中国の鯨

古代の中国では、鯨と墨とは同義である。皮膚を突き刺した後、墨を施し永久に痕跡を残すものであり、紋面・紋身ともいう。ここでは、鯨に関する問題のみを探ってみたい。

民俗学の成果によると、入れ墨の現象は世界の各地において、かつて存在したものである。今日に至ってもなお、一部の民族は一種の習俗としてこれを保持し続けている。研究者は、入れ墨は一種の標識・シンボルあるいは装飾であると考えている。洗礼と同様に、入れ墨をうけた後は、ある種の資格あるいは権力を取得し、氏族・社会の成員としてふさわしい待遇などを享受することができるようになる⁽³⁾というのである。

中国の古い文献の記述や社会観念においては、入れ墨は一種の「悪」のシンボルであり標識である。『漢書』などの文献に記録されているように、江南の呉や越の民族が「断髮文身」しているのは、日常的に川や海や湖で魚を捕らえていることに関係して、入れ墨が

水中の蛟竜の類を避け、身を守る魔除けの効果を持つと考えられていたからである。このことは、人が一度文身黥面した後、凶惡な蛟竜でさえも恐れて近寄らない⁽⁴⁾ということを示しており、入れ墨の「悪」は人間社会の外にある水中動物の世界にまで及び、水中動物でさえも「断髮文身」した人間には敢えて近寄らない⁽⁴⁾ことが分かる。

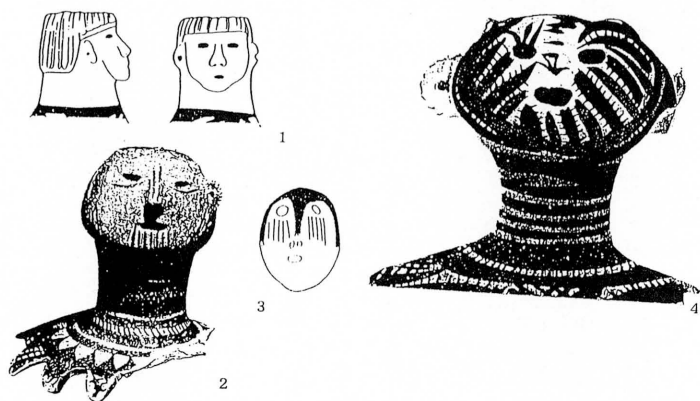
入れ墨の悪のイメージは鯨刑に由来するものであり、鯨の刑を受けた罪人に由来するものである。

中国における刑罰の起源は非常に古く、伝説上の三皇五帝の時代にまでさかのぼる。『尚書』などの文献の記録によると、堯舜の頃にはすでに鯨を含む五種類の肉刑が現れている。これがすなわち「五刑」であり、その中で最も軽い刑罰が鯨刑である。その上には、劓^ぎ（削鼻）、剕^げ（断足）、宮^{きゆう}（生殖器の切断）、大辟^{たいへき}（斬殺）があった。鯨は肉刑の一種として商周の時代を経て、前漢の初めによりやく廃止され、南北朝の時代にわずかに復活するも、隋唐の時代に再び廃止された。後晋の時代にまた復活し、宋元明清の時代にまで至った。このことは中国と周辺地域の歴史・文化に大きな影響を及ぼしている⁽⁵⁾。

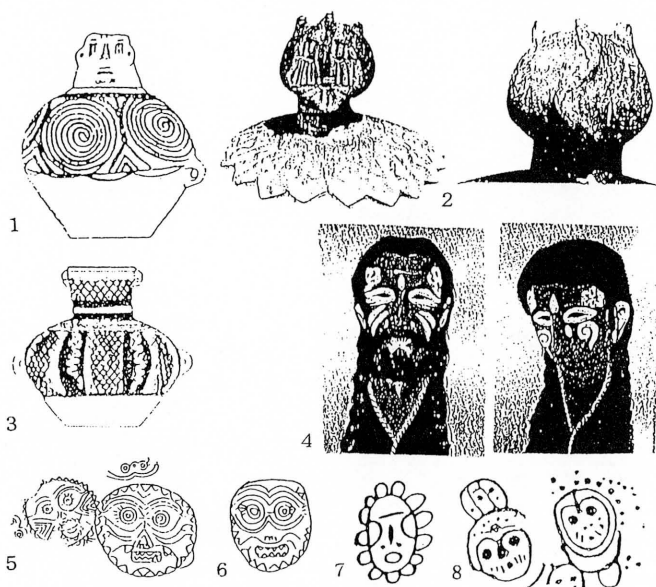
鯨などの「五刑」が堯舜の時代に始まるという説に関しては、漢魏の頃の学者は疑問を抱いていた。儒家の考えでは、三皇五帝や古えの聖賢の時代には、人々は相和^{あいわ}して、仁愛を以て共存しており、

このような残酷な刑罰を制定するはずがないと思われていたからである。したがって、漢文帝の時には、「有虞氏の時、衣冠を画きて、章服と異なるを以て戮と為す」という推測がなされた。

文献上の証拠はないが、伝説の三皇五帝の時代にあたる新石器時代には、確かに入れ墨の現象が見られることが、考古学上の出土文物から明らかになった。黄河上流の馬家窯文化などでは、一度なら



図一 1：甘肅秦安大地湾 2・4：広河 3：永昌鴛鴦池



図二 1：甘肅東鄉東 2・3：広河 4：新疆且末札洪魯克 5・8：内蒙古陰山岩画 6・7：寧夏賀蘭山岩画

ず紋面断髪（7）の陶塑の人物像が出土している。その年代は、少なくとも今から四千三百年前である（図一1～4）。考古学のデータからは、五千～四千年前の時期は、まさに都市文明、すなわち原始国家の起源の時代である。黄河流域・長江流域で多くの都市遺跡が発見されており、また建築規模が極めて大きく、副葬品の豊富な墳墓が出土し、この時期に階級が分化していたことは明らかである。実際、

早くも仰韶文化・大汶口文化の時代には、戦争や氏族内部の不平等から、特権階級が出現するに至っており、すでに刑罰に類する殺戮の現象が生じていたのである。^{（8）}

馬家窯文化の彩陶に見られる、黥面の模様は容器の形と密接な関係がある（図二1～3）。壺と異なっているのは、器の表面の絵画と首の部分に至る彫刻であり、その意味は言うまでもなく、一種の保護機能であり、壺の中身が外からの侵害を受けないうよう保護・保存することであ

り、これはあるいは原始の守護神であるのかもしれない。保護の任を担う者は、自ずから常人には備わっていない力量あるいは何か特異な能力を有しているはずである。特に、表面全体を黥の紋様で裝飾し、頂部に蛇の形をした裝飾が付属しているならば、その意味は明白であろう(図二一・二)。

これは単なる一例ではなく、他にも事例が存する。はるか遠方の新疆^{しんきやう}地域の南疆且末札洪魯克郷で、考古学者は今から三千年前の二体の紋面の遺体を発見した。紋のある部位は、眼・耳・額・頬であったが、この紋面もまた彩色の絵であった(図二一・四)。⁽⁹⁾そのほか、北方草原地帯の岩壁絵画には、しばしば入れ墨であることが窺われるものが存する(図二一・五・八)。⁽¹⁰⁾

商から春秋戦国時代にかけては、黥の刑は広く行われ、またしばしば他の刑罰と併せ行われた。今日見られる多量の甲骨文や金文の中には、すでに「辛」と記した黥面の道具と解釈できるものがあり、また各種の黥面の行刑があったことを示す符号がある。⁽¹¹⁾ただし、出土した遺体の中には黥をした者は少なく、このことはあるいは黥徒が追放されていたことと関係があるのかもしれない。

商鞅^{しやうあつ}が秦に仕えたと、刑罰を嚴格にし、まず法を知りながら法を犯した、公子の師匠である公孫賈を黥刑に処した。さらに、「凡そ城を攻むるの戦、兵士如し死すこと能はざれば、千人にて環らし、睹諫して城下に黥劓せよ⁽¹²⁾」と定めた。また、『秦簡』「法律答問」に

は「盜六百六十錢を過ぐるは、黥して以て城旦と為せ」と記載されている。そして、秦始皇帝は焚書坑儒を行い、「三十日に下して、焼かず、黥して城旦と為さしめ」た。⁽¹³⁾

前漢の初め、秦王朝の厳しい刑罰と秦末の戦乱で人民が極度に疲弊したことを踏まえ、漢文帝の時代から政治の上では「無為而治」、経済の上では「輕徭薄賦」などの政策を実施し、法律の上でもそれに応じた修正を行い、黥・劓・剕などの肉刑を廃止した。しかし、象徴としてはつきりと痕跡が残る黥刑と、口にするものはばかられる宮刑は残されたのである。

魏晉の時代、肉刑を復活すべきか否かをめぐり、何度も議論が行われたが、全面的にこれを復活するまでには至らなかった。唐の段成式の著書『酉陽雜俎^{ゆうやうざそ}』の記載によれば、晋代に黥刑を復活し、黥をする部位や大小につき明確な規定が設定された。同書にはまた、梁朝でも同様に黥刑を行ったことを記載している。⁽¹⁴⁾ただし、杜佑著『通典』によれば、梁武帝は天監十二年(公元五一三年)に「又黥面の刑を廃し」た。⁽¹⁵⁾黥刑は肉刑と同様、南北朝の時期にはあまり流行しなくなったことがわかる。

隋唐の法律では、もはや黥・劓などの肉刑は行われず、杖・笞刑に改められ、同時に流刑・徒刑は残されたが、犯人の身体に永久に痕跡を残すことは行われなくなった。

五代の後晋の石敬瑭^{せきけいとう}(九三六〜九四二年在位)が皇帝になってか

らは、公式に鯨刑を復活させ、流刑と併せ行った。罪人の顔に字を刻して辺境の地に流し、これを「刺配」と名づけた。

宋は後晋の制を受け継ぎ、罪人は一旦判決が下ると、ただちに鯨、あるいは服役、あるいは辺境への流刑が行われた。よく知られている『水滸伝』の物語にあるように、宋江は江州に流され、武松は孟州に流され、林冲は高太尉の怒りにふれ、不毛の地である滄州に流された。流されるにあたっては、例外なく「金印」の鯨を施された。これ以後清朝まで、鯨（刺字）と流刑による懲役制度は中国の封建制度が消滅する時点まで続いた。⁽¹⁶⁾

以上から明らかであるように、鯨は罪人を処罰する刑罰の一つであり、悪を治める一手段であった。支配者の側から見ても、民衆から見ても、鯨は一種の忌み嫌われる方法であった。

上に述べたように、鯨は考古学的には馬家窯文化に始まるが、その起源はおそらくより以前にあると思われる。鯨の起源と「斬」「殺」とは密接な関係がある。当初の生命を断ち切ることから、ある種の器官の働きを断ち切ることに変化し、やがては象徴的にはつきりとした痕跡を残すという方向に変化したのである。

人類の歴史の過程が示す通り、刑罰は戦争に源を発する。ゆえに、中国の古代にはすでに「黄帝兵を以て天下を定むるは、此れ刑の大きな者なり」ということを認める人もいた。戦争における大量殺戮に比べると、刑罰による処置は、明らかにその範囲に規範性があり、

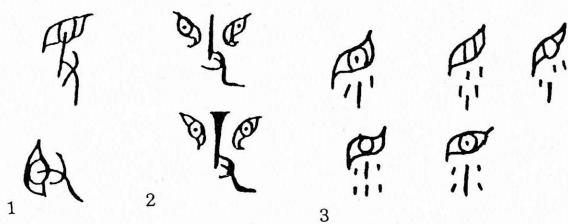
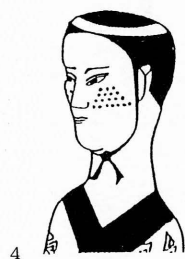
より小規模である。戦争とは、本来敵方の兵員を減らすことを目的とする。ただし、原始時代の戦争の場合は、殺害することが多く、

捕虜とすることが少なかった。捕虜の価値が認識されるようになってからは、全員殺害することから肉刑に改められ、もって逃亡を防止する方向に変わったのである。「盲目」「刖足」「割耳」「削鼻」などは、「鯨面髡髮」に改められた。しかし、戦争の捕虜であれ、氏族の構成員への懲罰であれ、一度刑を受けると、その身分・地位はそれに伴って変わり、正規の構成員に復帰することはできなかった。

鯨刑の歴史に関する簡単な考察に引き続き、さらに鯨刑を実施した部位と方法について見てみたい。前に述べた通り、馬家窯文化の彩陶鯨面の形象土器は、あるものは顔全体に入れ墨を施し、あるものは眼の下と口の下に施されるのみである。『周礼』「秋官」の鄭玄の注には、「墨は鯨なり、先づ其面を刻み墨を以て塗ぐ」という。

『尚書』「呂刑」の注には、「其の額を刻みて涅む」と述べられ、『白虎通』もまた「其の額を墨す」と記述している。殷商の甲骨文・金文の中で、上が眼、下が三個、あるいは四・五・六個の点の表示は、湖南・長沙にある戦国時代の楚の墓から出土した彩色の女性俑と同様に、眼の下に鯨を施したことを反映しているものかもしれない⁽¹⁹⁾（図三—3・4）。鯨刑を行う部位を、具体的かつ詳細に記録をしているのが晋令である。

『太平御覧』および『西陽雜俎』などは、全て晋令の規定を引用



図三 1～3：(康殷『古文字形発微』による) 4：湖南・長沙戦国楚墓

している。「奴始めて亡ぐるは、

銅青若くは墨を加へ、両眼に黥す。

後に再び亡ぐるは、両頬の上に黥す。三たび亡ぐるは、眼の下に横

に黥す。皆長さ一寸五分なり」という規定である。⁽²⁰⁾『南史』「明帝

紀」には、「若し赦に遇へば、黥は両頬の『劫』字に及ぶ」と記述

されている。

宋代には後晋の「刺配之制」を

継承したが、黥の部位については、

比較的寛容であった。盗みを行っ

た罪人は、初犯は耳に黥した後、

徒刑に処した。流刑者には方形の

黥、杖刑者には円形の黥を行った。

杖刑を三回犯すと、初めて顔の上

に黥を行った。それは、五分より

小さいものであった。元代には、

は異なり、漢人・南人は盗みを三回行くと初めて黥を首に行った。

清の法律では、満人は重犯に太股に黥を行い、漢人は一律に顔に黥

を施し、部位は鬢と頬の間であった。大きさは一寸五分の正方形で、

罪名と流刑地は左右両側に黥した。⁽²¹⁾

商周の文字と文献によれば、黥の直接の起源は眼に対する刑罰と

関係がある。針で眼を刺したり、指で眼をつぶすことを意味する商

代の多くの記号は、間違いなく眼の機能を破壊することを目的とし

ており、「断舌」「聾耳」と同様、永久に視力を失わせるものである⁽²²⁾

(図三・1～3)。後には、これが次第に眼の周辺に黥を施す形に変

化した。これは失明させるものではないが、黒い痕跡を残し、頭に

黒布をかぶせる刑罰と同様、人に暗黒の生活を強いるものであった⁽²³⁾。

それゆえ、晋令の定めるところでは黥が眼から始まるのは、根拠の

ある話であり、でたらめなものではない。

黥の道具については、郭沫若はこれを「割剕」という名の一種の

小刀であるとし、康殷は陝西省の綏徳から出土した、一種の青銅器

で短く薄いかみそりであるとしている。⁽²⁴⁾しかし、銅の錐もまた処刑

に用いられ、かつ金属器の中では最も早く現れたものである。東部

では竜山文化時代に出現し、西部では齐家文化時代に登場する。仰

韶文化・大汶口文化時代にはよく見られる、骨・角・牙製の錐、ま

たは玉・石製の四稜尖状器などは黥の道具とは断定できないが、硬

い玉・石などの器物の上に細工できるのであれば、人間の皮膚の上

に刻むことは容易であったであろう。

中国古代を通観すると、刑罰の一種としての黥は新石器時代に始

まり、商周時代および漢代以前に発達し、その後、唐代には黥を装

飾として用いたという記載はあるものの、多くは地方政府による「街肆悪少」に対する処罰の手段であった。⁽²⁵⁾つまり、「鯨面文身」は終始社会の一般大衆にとって受け入れ難いものであった。

3 日本の鯨

中国と日本は一衣帯水の関係であり、海を隔て向かい合っている。しかし長期間、中国人の日本列島の状況に関する知識は極めて少なく、ただ「楽浪海中に倭人有り」と伝え聞くのみであった。倭人がどのような存在であったかということも明らかではない。西晋の時代、陳寿が『三国志』「烏丸鮮卑東夷伝」を撰述した時、初めて日本列島の様相を記録して後世に伝えたのである。これにより、海東の倭人が江南の呉人・越人のように、「好く魚鱗を捕ること、水の深淺無く、皆沈没して之を取る」のみならず、「男子大小と無く、皆鯨面文身なり」というものであり、それは「以て大魚水禽を厭ふ」という理由であったことが分かる。

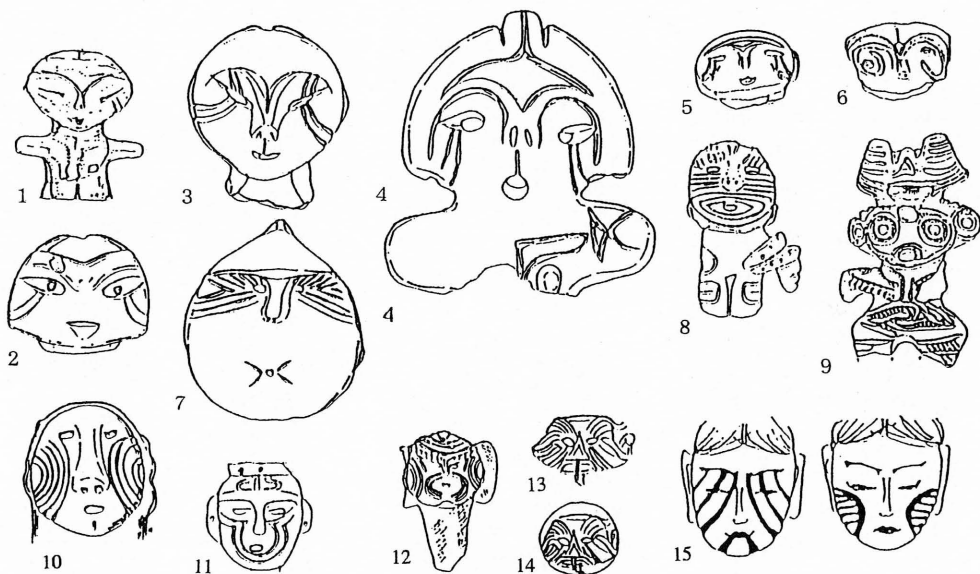
考古学上の発見は、『三国志』における倭人の鯨面文身の記載が誤りでなく、かつその起源が相当古くから三千年あまりも続き、日本民族の文化形成に大きな影響を及ぼしていたことを明らかにした(図四)。

縄文時代の入れ墨は土偶の形で現れるものであり、その分布範囲は主として関東・東北地方である(図五)。弥生時代には土偶のほ

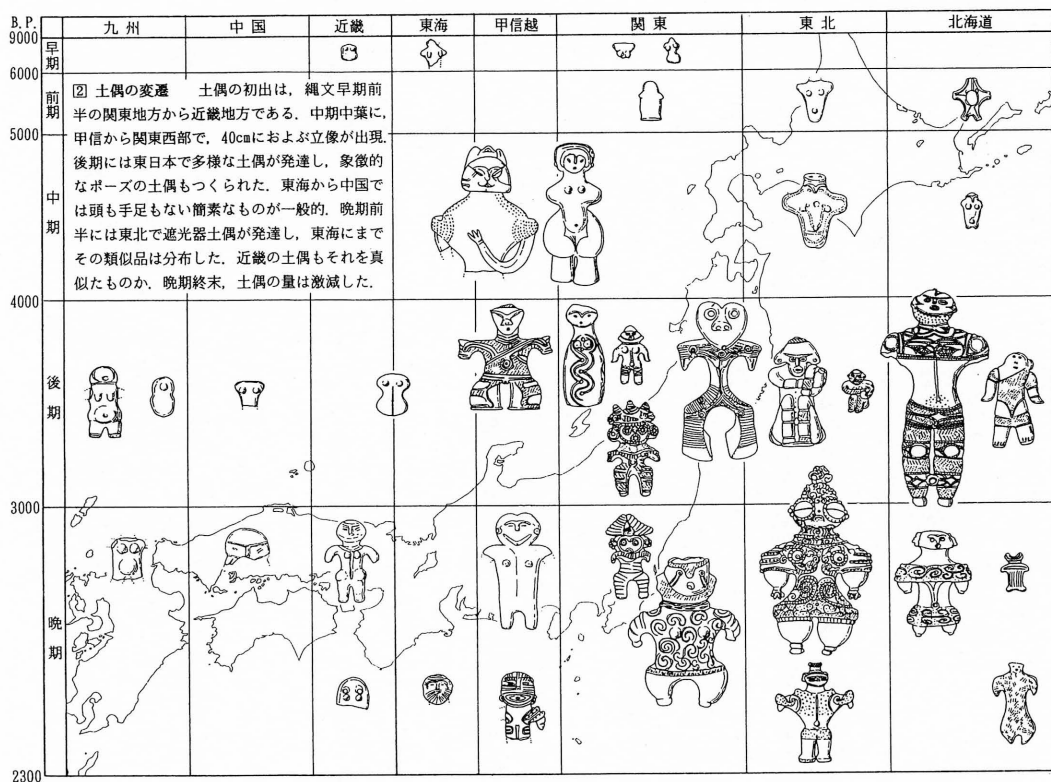
かに土器と結びつき、土器の表面に装飾を加える表現となり、同時に石棺の蓋の上にも刻まれた。その分布範囲は設楽博己の考証によれば、東北部では茨城、西南部では九州に及び、愛知と岡山にも比較的多くみられる(図六)。古墳時代には、土偶と容器の結合形式はさらに発展して埴輪となり、上半身は土偶、下半身は筒形の器となった。⁽²⁶⁾

縄文時代の鯨面土偶は、中期前半に始まる。この時期の土偶は、幾何学的な形から写実的な人体へ変化する段階であり、同時に大陸との交流が比較的頻繁になる時期でもある。考古学の発見による多くの新たな要素は、日本列島では歴史上前例のないものであったが、大陸では珍しいものではない。土偶の顔の部分に刻まれ、あるいは錐で刺された痕跡が残っているという現象が明らかになると、これらの傷痕は縄文人が意識的につけたものであることを承認しないわけにはいかなかった。特に一か所だけではなく、また一度ならず繰り返して顔に刻んだ同じ時代の土偶が出現することは、この時代の鮮明な特色を有していることをさらにはっきりと表すものである(図四-1・2)。そして、関東・東北地方の山間部集落に集中しているという現象は、『三国志』の鯨面文身が「以て大魚水禽を厭ふ」ためであるという記載とは少し様子が異なっている。なぜなら、山間部の生活は「大魚水禽」と無縁であるからである。

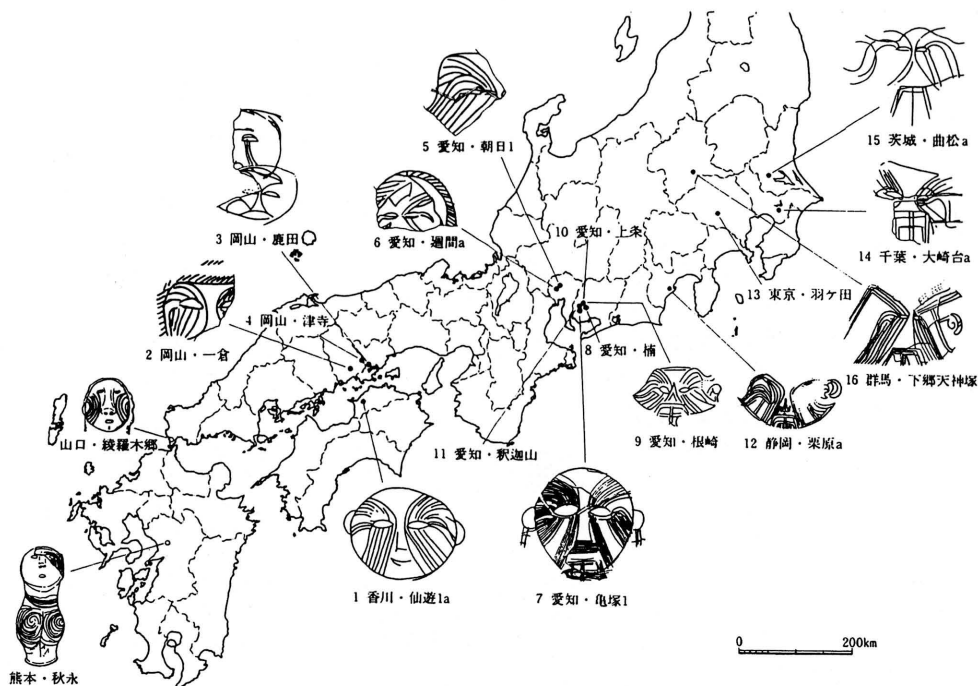
縄文後期は中期の伝統を受け継ぎ、装飾上の変化は少ない。傷を



図四 1:長野富士見町藤内 2:山梨釈迦堂 3:静岡千枚原 4:山梨一の沢西 5:埼玉行司免 6:茨城加藤他 7:静岡姫宮 8:長野上伊那郡内 9:栃木神の内 10:山口綾羅木郷 11:長野岡谷市海戸 12:長野松川町玄与原 13・14:愛知根崎 15:埴輪(日本風俗史学会編『日本風俗史事典』による)



図五 (日本第四紀学会・小野昭・春成秀爾・小田静夫編『図解・日本の人類遺跡』による)



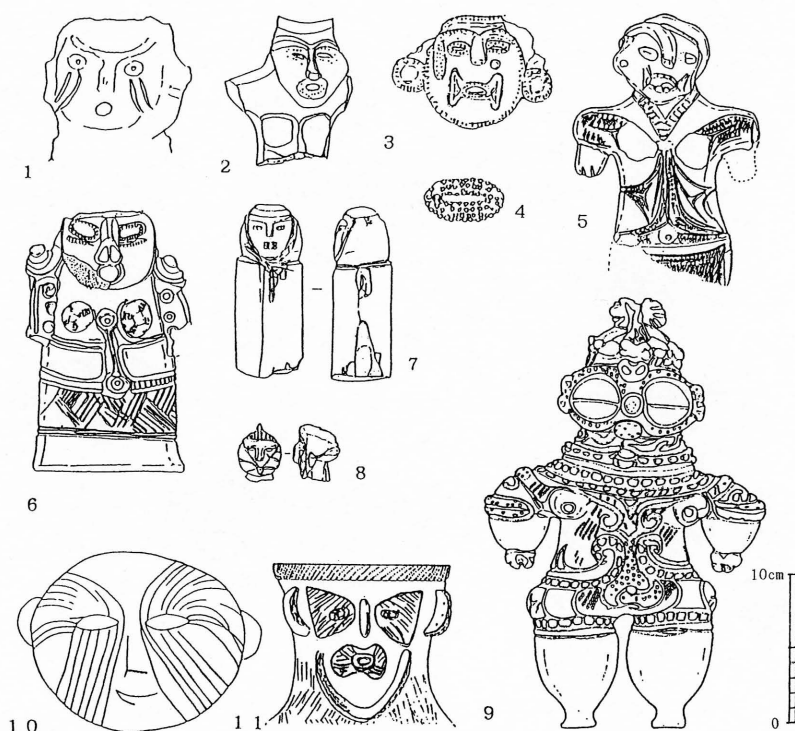
図六（設楽博己「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集、1990年による）

刻んだ部位は眼の下の部分に集中するが、後期には双斜の線は減少し、眼の下に水平あるいは垂直に装飾することが比較的良好に見られるようになり、かつ各種のスタイルをした半円弧形のものも現れる。同時に、ミミズク形土偶の出現に伴い、眼と口の部分が一層大きくなった。これと呼応して、この時期、単体の耳・鼻・口の形式のものが出現し、かつ懸垂できるように小さな穴を穿った仮面の形式のものもみられる。

晩期の入れ墨の一つの突出した特徴は、傷を刻んだ面積が徐々に拡大している点であり、刻まれた文様も一〜二種類から四〜五種類以上に増えていることである。両眼から口までの部分には、くまなく入れ墨が施されている（図七―3〜5）。さらに注目すべきは、この時期、頭巾を被った形式のものが出現することである（図七―7・8）。遮光器土偶の登場以降は、土偶の顔には全く無表情な大きな目隠しだけが残し、目隠しの下に鰐の刻印の痕があるのかどうかは、知る由もない（図七―9）。

弥生時代における入れ墨のある土偶は、縄文時代のものに比べると大きく減少している。香川で出土した土偶は、山口や熊本で出土した土偶と比べると、より多く縄文時代の特色を有しており、前者は比較的眼と口の部分の入れ墨を強調しており（図七―10）、後者は両頬を中心として同心半円状に耳へ向かう弧を描いている（図七―11）。

弥生時代に初めて現れる、器物の表面に刻んだ入れ墨は、鼻を中心として顔を半円に分割し、上は額から下はおとがいまで、細密な半円弧線を施していることが多い。この形は山口綾羅木郷土偶の形式と同様であるが、異なっている点は弧の範囲がさらに拡大し、同



図七 1：群馬板倉町 2：宮城丸森町入大 3：栃木後藤 4・9：岩手八天 5：宮城二月田 6：茨城瓦吹 7：秋田湯出野 8：長野岡谷市中島 10：香川仙遊 11：茨城女方

時に目尻の外のところに一か所刻みがふえており、一見したところ、中国の京劇の臉譜とよく似ており、かつ大多数は髪がない。この当時の鰐面と断髪に密接な関係があったことをうかがわせる。

古墳時代の入れ墨の形式は、設楽博己の考証によれば、主として四種類ある。すなわち、鼻上翼形、顔部環状形、二者の結合形、および八字形である。身分上の特徴としては、多くは武人・力士あるいは芸能民であることがあげられる。分布範囲は主として古墳が比較的多くかつ規模の大きい畿内・西日本および関東などの地域である。

『古事記』や『日本書紀』の記載によれば、神武天皇から雄略天皇までの期間、日本の社会には鰐を主とする刑罰があった。しかし奈良時代から室町末期にかけて、入れ墨は日本の歴史上から突然消滅し、あとかたもなくなった。文献にも見えなくなり、実物を探すことも困難である。しかし江戸時代に入ると、入れ墨は再び身体装飾として全国に広く行われ、その後明治・大正に至るまで、政府が度々禁じたにもかかわらず、これを杜絶することはできなかった。⁽²⁷⁾

日本列島における鰐面の歴史的発展・変化を通観すると、縄文中期に出現して以後、縄文晩期に盛んになり、弥生時代には衰退し、古墳時代にも引き続いて見られるが、奈良時代以降消滅し、江戸時

代に再び復活する。その年代上の変化の特徴と中国鯨面の歴史的発展とは基本的に軌を一にする。身分上の特徴としては、縄文中期には多く女性であり、晩期には男性が優勢を占め、弥生・古墳時代には武人だけになる。このことから推論すると、日本の鯨面の形式は初めから一種の装飾というよりは、一種の特殊な記号であり、中国古代と同様、悪の性質をもった身分の象徴であった。土偶の表現には魔除けの意味が込められていたが、呪詛の代用品としての要素もあり、弥生・古墳時代には一種の護衛の機能のみを有し、その機能は中国と一致しており、両国の鯨面の現象には一定の関連性を見ないわけにはいかない。

4 中日両国の鯨の比較

鯨の中日両国における起源・発展・変化の基本的特徴を見てきたので、ここでさらに両国の違いを具体的に分析してみたい。

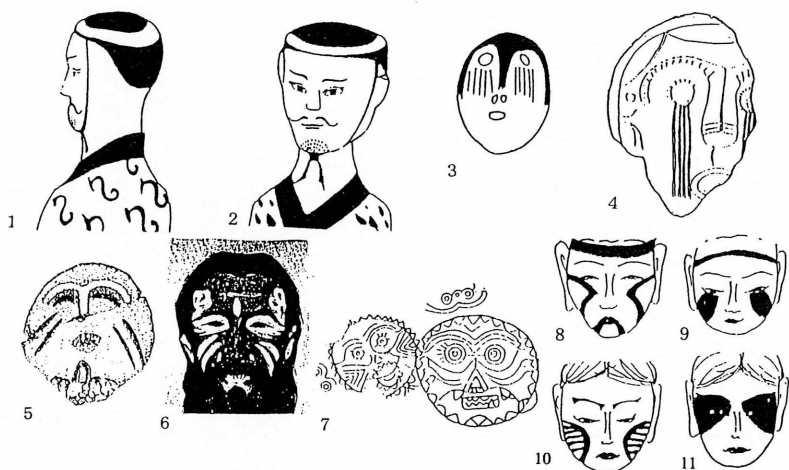
まず、起源の時期である。現在見られる馬家窯文化の断髪鯨面の彩陶は、大部分が馬廠類型に属するもので、今から約四千七百～四千百年前のものである。断髪鯨面でない形は、大地湾時代にすでに現れており、その年代は今から八千年前にさかのぼる。考古学上のデータから言えば、甘肅省・青海省一帯の馬家窯文化は、仰韶文化廟底溝類型を直接継承・発展した一種の地方文化であり、馬廠期に出現した鯨面の現象はその地方文化に含まれ、中原の仰韶文化の影響

を受けた結果である可能性が非常に高い。

日本において最も早く鯨面土偶が出現するのは縄文中期前半であり、その時期は今から五千～四千年前であり、馬廠期とはほぼ一致している。この時期は、黄河下流の山東竜山文化と長江下流の良渚文化の最盛期である。考古学上の種々の事象から明らかであるように、都市や国家が出現すると、権力と国益を維持するための刑罰などの様々な手段も自ずからそれに伴い誕生する。そうでなければ、面積が数十万～数百万平方メートルもあるような都市が出現することはありえない。

次に、地域的分布である。中国の特徴は、鯨が刑罰となつて後、鯨を受けた刑徒は自分の住んでいる土地に留まることができなかった。したがって、文献の上では鯨刑の事象が出てくるが、実際には、むしろほとんど辺境から実物資料が出土している。すなわち、鯨を習俗とするという記載があつても、その大多数は不毛の僻地に属する場所である。新石器時代の鯨面の彩陶は甘青一帯で見つかり、商周時代の紋面の遺体は新疆から出土しており、また陰山・賀蘭山などの岩の壁画にもわずかに見られるように、全て鯨が中原ではいかに歓迎されていなかったかということを明白に示している。

日本の鯨面は、早期には関東・東北地方に集中し、かつ山間部の出土が最も多く、その後海辺の貝塚地帯に移った。日本の縄文時代の生活環境から言えば、当時の山間部は比較的貧しい地域であつた。



図八 1・2：湖南・長沙戦国楚墓 3：甘肅永昌鴛鴦池 4：埼玉発戸 5：岐阜南垣内
6：新疆且末札洪魯克 7：内モンゴル陰山岩画 8～11：埴輪（日本風俗史学会編『日本風俗史事典』による）

なぜなら、生活資源の観点からは、海辺部は山間部より産物がずっと豊富であったからである。弥生時代と縄文時代は、ともに比較的辺境の地であった関東・愛知および西日本などの地域にとどまった。しかし、古墳時代には状況にかなり大きな変化が生じ、周辺の黥面

の習俗が突如として政治的中心部に入りこんだのである。

第三に、黥面の部位と形式である。中国の原始時代の黥面の部位には、三つの主要な形式がある。第一に鼻を中心にして顔全体の四方に向かって拡散する方式の刻絵であり（図一―4）、第二に眼の下に涙が垂れるような刻絵（図一―3）、第三に眼・口・あごの局部に刻むほか、あるいは眼の下に横線を刻み、あるいは口の下に縦線を刻み（図一―2、図二―2・5～7、この習俗は現在まで南アジアのある民族に残っている）、あるいは両耳からあごにかけて傷を付ける等々である。商周の時期には、眼の周囲・耳の周囲・額・頬骨などの部位に刻んだ面積は比較的小さい（図二―4）。戦国時代には、主として眼の下と口の下に集中し、眼の下に平行して梯子形の正方形を刻み（図三―4）、下あごには半円形を刻んだ（図八―1・2）。この時期における重要な変化は、線状の傷から錐で刺した傷へ変化したことであり、後世の「刺配」という記載と符合する。

日本の入れ墨は、縄文中期は比較的小さく、大体眼の下にあり、目尻、あるいは眼の下から斜めに耳たぶにかけて左右対称、あるいは片方のみに刻み、その記号としての特徴は顕著である（図四―1～4）。後期には、中国の青海省の柳湾・甘肅省の永昌で出土した、涙が垂れる形式のものと同じものが出現している。異なっているのは、中国の下垂する文様は比較的短く、下端が小鼻の両側ぐらゐまでの長さであることである。日本の埼玉県羽生市発戸遺跡および福

鳥鼎三貫地貝塚に見られる入れ墨は、眼の下から垂直に下あごまで延びている(図八-3・4)。それと同様に、眼の周囲・口の周囲・眼の下・横線の鯨および弧線の鯨が、髭の形で放射状に顔全体に刻飾されたものと、刺し傷の形のものとは均等に出土しており、中期に比べて入れ墨の形式が複雑化している(図四-5・9、図七-1・9)。弥生時代は縄文時代の伝統を継承し、入れ墨の刻みの形式と部位には規則性がなく、その差異は地域環境の差異と関係している。古墳時代になると、前の時代よりやや簡素になり、左右の頬あるいは眼下にわずかに色を塗るだけで、もはや顔全体に刻む形式はなくなった。この時期は色で顔面を塗っており、一見して母斑のようでもあり、その記号・符号としての意味は明白である(図八-8・11)。

第四に、出土状況の考察をしたい。中国における新石器時代の鯨面人首の彩陶壺は、多くは墳墓から出土し、商周時代には遺体に直接見ることができ、戦国時代には木製の男女俑に見られ、そのほかには壁画にも見られる。

日本の縄文時代の入墨は主として土偶に見られ、出土状況は比較的複雑である。あるものは住居から出土し、あるものは墳墓に見られるが、さらに多数は祭祀の場所と関連がある。かつ興味深いことには、一部の土偶には小さな穴を穿ったもの、あるいは欠けた痕跡のあるものがあり、中期の土偶が比較的小さいことを特徴として

いることと合わせ考えると、土偶を身につけていた可能性もある。弥生時代には、墳墓あるいは環濠・貯蔵穴から出土している。縄文時代と同様、大多数は完全な形で残存しておらず、それが破損していた原因は同時代の人々の考え方と関係がある。古墳時代には、例外なく古墳から出土している。以上の状況を総合すると、共通する特徴の一つには、全ての入墨は意図的に施されたものであり、記号・符号の目的は明白であり、副葬品・祭祀への使用・容器や棺の蓋への付加および住居や環濠に置くこと、または部分的に破壊されていることなど、全て特殊な意味を有している。

まず、中国の状況を見てみよう。新石器時代の鯨面の首は壺の口の部分にあたり、守護・保存の意味は一目瞭然である。壺は容器の一種として主に食糧あるいは水・酒などの液体の貯蔵に用いられた。北方地方では、水を入れるのに用いられることが多い。特に耳の付いた壺があることは、さらに通常運搬に用いられた道具であることが明確に示している。したがって、水を貯えた可能性はさらに大きくなる。乾燥した地域・季節では、水の重要性はおよそ食物以上である。黄河上流の馬家窯文化では、植物の生育は現在よりずっと順調であったが、気候・温度については現在と大差なく、降水量も現在と比べてあまり変化がなかったようであることから、大量の陶製の壺が出土していることは水不足と関連があるはずである。つまり、水の貴重性はかつて黄河流域の伝統であり、周王朝が中原に君臨し

て以降は、国家が行う祭祀・儀礼の中で、酒や水を主要な供物と定めたのである。この習俗は江南の楚国にまで影響を与えただけでなく、今日の北方の地方の農村にまで影響を与えている⁽²⁸⁾。よって、十分に水を守ることは、家財を守ることや家族の生命を守ることと同じであった。壺の口にこのような黥面の形象を特別に表現するといふことは、少なくとも壺の持主にとっては心理的な安寧をもたらすものであり、したがって死後も地下に副葬したのである。

当時、防衛の職務を担う者は、戦いで敵が打ち勝つことのできない威力を持っている者か、あるいは不可思議な魔力や神通力を有している者であった。顔を全く変形させるような彫りものをしていような、尋常ではない者、あるいは集落のために専ら防衛の任にあたる戦争の捕虜や、他処から流浪して来た罪人、さらに頭上に蛇を巻きつけた人間については、その威力は言うまでもなからう。中国の北方では、人は蛇を虎のごとく恐れ、しばしば蛇を財宝を守る守護神として祀る。北方の民俗に見えるところでは、黄蛇（黄竜ともいう）は倉庫を守り、青蛇（青竜ともいう）は井戸を守る。食糧であれ飲料水であれ、全て蛇に守ってもらっていたのである⁽²⁹⁾。これは、もちろん蛇が倉庫でネズミを駆除し、井戸で蛙を除去するという自然の摂理であるが、蛇を一種の悪い動物とするのは黄河流域の共通の認識である。ゆえに頭上に蛇を巻いた黥面の人物は、その悪としての面目は明々白々であり、悪人には守衛の職を司らせることが最

適であったのである。

文献の記載するところでは、黥刑を受けた者は門番となり、城門を守ったが⁽³⁰⁾、後には大多数は辺境の地に流され、その場所にある国門を守る門番となった。総じて、これらの人物は城門・国門を守る門番であり、このことから馬家窯文化に見られる守護式の黥面の形式は、後世の門を守る行為のさきがけであると考えられる。

先に述べた通り、黥刑の顕著な特徴は永久的な記号を残すという点である。よって、単に顔に傷痕を残すことにとどまらず、さらに傷口に墨を塗り、その刻印をよりはっきりとさせたのである。黒・赤という色は中国の古代では最も重要な色彩であるが、黒は総じて赤ほど好まれなかった。黒は往々にして、暗黒・恐怖・死亡などという意味と関連していた。古人は、人は死後「鬼怪」に変わり、「鬼怪」は暗黒の中に長く留まるのみならず、その形も生きていた時と異なり、五官が正常でなく、顔色も真っ黒で、容貌が全く良くないものと考えた。したがって、人々は「鬼」に似ていたり、あるいは「鬼」よりも醜惡な顔であれば、さらに威力があると考え、凶惡・醜惡な仮面の形を作り、「鬼怪」・妖魔のように時を定めて舞踊し邪鬼を取り除いた。北方の民間伝承では、「鬼」は黒い顔をしているが、それでも墨を顔に塗った人を恐れ、また黒い顔の人を恐れるという。黒い顔の巨漢は、凶惡な鬼神のように人に恐怖感を与えた。このことと、黥の刑徒との関連性はないであろうか。

顔に墨で鯨を施すほかに、古代の刑罰の中には頭上に黒布を載せて一般の人と区別するというのがあった。⁽³¹⁾一九七五年に陝西省岐山県董家村で出土した銅匱^{どうけい}には、明確に西周時代の鯨に関する規定が記述されていた。銘文の大意は、「私は本来ならばお前を一千回鞭打ち、鯨をして頭巾を被せ、職を免じて奴隷にすべきである。しかし、お前に特赦を与え、一千回鞭打ち、鯨をして頭巾を被せないで奴隷にしよう」というものであった。⁽³²⁾この種の頭巾を被せる習俗は、中国東部の沿海地域には依然として存在する。異なる点は、黒い頭巾が綺麗な頭巾に変わり、日除けや防風の役割に変わっている点である。しかし、頭巾を被った土偶は日本で発見されており、例えば長野県岡谷市中島の縄文中期の包頭土偶や、山梨県金生遺跡^{きんせい}の縄文後期の包頭土偶などは、黒頭巾を被せる刑罰と一定の関係がある。

醜悪さは、鯨刑のもう一つの表現である。中国の古代では、肉刑を受けた者は汚れた者とみなされ、日本の「持衰」(『三国志』東夷伝)のように畜生と同様、沐浴を許されなかった。一見して他人に嫌悪感を催させる、鼻をつまみ目をそむけさせる、避けて近よることを恐れさせるなど、これらがこの刑罰の本来の目的である。

日本の縄文早期の土偶は、世界各地のものと同様に、最初に作られたのは多くは女性の形であり、どこにも醜悪なところはない。鯨面の形式および無表情の遮光器式土偶が現れて以降、土偶の形が

徐々に恐ろしいものになってきたのである。当初は、多子多産・五穀豊穡を願うものであったのが、性器をかくすようになるのに伴い、凶悪な顔がますます盛行するようになった。

なぜ、突然このような変化が出現したのだろうか。おそらく、戦争など外部の要因が関係していると思われる。安定した生活の下では、人々は豊作と多産を祈るが、不安定な動乱の状況下では、人々は自ずから身の安全を希求するようになるのである。

魔除けは、一種の安定を保持する手段である。今から八千五百年前の黄河下流の後李文化に見られるような、死者の手に貝の刀(貝刃)を握らせる葬送の方式が始まると、大汶口時代には石斧^{せきふ}を、良渚文化・竜山文化時代には石鉞^{せきえう}・弓矢を副葬し、商代には銅鉞、秦漢時代には太刀・鎮墓獸、六朝には辟邪、唐宋時代には門神など、いずれも利器あるいは悪人悪獸をもって、妖魔による祟り^{たた}を除き鎮めた。民間の社会では、これによって鬼・魔物を除く「巫」という職業が誕生した。そして中国の巫者は現代に至るまで、未だに墨で顔を真っ黒に塗り、専ら夜間に活動を行う。⁽³³⁾この習俗は、おそらく鯨面と関係がないという訳にはゆかないであろう。

5 鯨と渡来人

『三国志』が日本列島の「鯨面文身」の情報を紹介して以降、さらに稲作文化についての調査が深まった結果、ますます多くの研究

者が、日本の入れ墨は中国江南の呉・越人の入れ墨と同じであり、渡来人と長江流域の住民とは密接な関係があると認識するに至っている。

稲作は南方に起源を有し、南方經由あるいは北方經由で日本に伝来したであろうことは疑いの余地がない。しかし入れ墨の文化から論じると、入れ墨の伝来は稲作の伝来よりずっと以前であり、北方から伝来した可能性がさらに高い。もし弥生時代の渡来人が渡来したのが「水稻を逐ひて居」した南路、すなわち江南から琉球列島を経て、あるいは九州を経て、あるいは中国東部沿海から徐々に北に移動するルートであるとすれば、その前に黄河流域から日本に移住した先住民は明白な肉刑の特徴を保持し、北方の不毛の地から海を越えて日本の北海道あるいは東北地方に移住し、徐々に南下したのであろう。その移動ルートは三つ存在する可能性がある。第一は、黒竜江から樺太に至り、海を渡って北海道へ南下し、さらに東北・関東地方に至るルートである。このルートは、すなわち後世のアイヌ民族が行き来した北のシルク・ロードである。第二は、朝鮮半島を経て日本海を横切り、西海岸に沿って北上して島根・福井などの地に上陸するものである。第三は、山東半島を経て、朝鮮半島の海岸に沿って南下し、向きを変えて日本海を北上するものである。

黥刑の徒が日本に移住した重要な要因は流刑であり、北方への流刑は起源として最も古く、継続した時間も最も長い。

流刑は、古い刑罰の一種である。『礼記』『王制』に、「公家刑人を蓄へず、大夫養はず、（中略）之を四方に屏^{しりぞ}けるは、唯だ其の所なり」とある。鄭玄はこれを、夏殷の時代には、犯罪人は流刑にしたのち殺し、決して留め置かなかったと注釈した。後漢の初めの梁統も、三皇五帝の時にはすでに流刑を行っていたと考えた。『拾遺記』に載っている民間伝承によれば、黄帝と蚩尤^{しゅう}とが戦って、蚩尤の兵は敗れて首をはねられて殺され、その部族も零落し、従順な者は鄒屠の地に移され、反抗的な者は寒冷荒涼な北方の地に追放された。同様に、水神の特徴を有していた南方・東南方の共工も、蚩尤と同様の運命に落ちた。『大戴礼』『五帝統篇』は、帝堯が「共工を幽州に流し、以て北狄に変らしむ」とする。『尚書』『堯典』は、舜が摂政になったのち、「共工を幽州に流す」という。『荀子』『成相』は、「禹の功有るは、下鴻を抑へ、民害を辟除し共工を逐ふ」とする。『韓非子』『外儲説』は、「堯（中略）又た挙兵して共工を幽州の都に誅す」と記す。『漢書』『刑法志』は、「唐虞の際、至治の極にて、猶^なほ共工を流し、謹兜に放ち、三苗に竄す」と述べている。このように数多くの文献に見られるように、共工を流刑にしたという史実は信ずるに足り、その流刑地と共工・蚩尤の本来の故郷とはちょうど正反対の位置で、一方は温暖、他方は寒冷の地、一方は数多くの味方のいる所、他方は味方のいない不毛の地というように、流刑は一旦行われると、流刑者は場所を選択する余地はなかった。

「之を四方に屏げる」ということで、南方人を北方に移したり、水郷で生活する人間を乾燥した土地に移すというように、人を劣悪な生活環境に置くという、その目的は処刑と何ら変わらなかった。

夏商の時代には流刑はさらに普及し、流刑する地域も依然として辺境の地であった。『括地誌』は、「夏桀無道にして、湯之を鳴条に放ち、三年にして死す」と記している。『尚書』「太甲」および『史記』「殷本紀」は、「帝太甲暴虐にして、湯の法に遵はず、伊尹其れを将て之を桐宮に放つ。周厲王暴虐にして、国人王を虀に流す」と記している。

春秋戦国時代には、各国とも全て流刑という刑罰を有しており、異なるのは流刑地のみであった。秦は西戎の地に位置していたため、多く蜀の地・四川に流刑した。齊は三方を海に囲まれていたため、流刑地としてしばしば島を選んだ。『秦簡』「法律答問」には、一人の士伍が、自分の息子を刖足の刑に処した後、蜀郡の辺遠県に流刑にし、一生その地から離れられないように、上官に願い出たという実例が掲載されている。田斉が姜斉王朝を倒した後、姜太公の家系の最後の国君であった康公を海上に流刑している（この地がすなわち現在の山東省の長島である）⁽³⁴⁾。

秦始皇帝の九年、嫪毐が乱を起こし、「爵を奪ひ蜀の四千余家を遷」した。同十二年には、呂不韋が自殺し、呂の近親者は「皆逐遷」された。同三十三年には、「謫を以て民五十万人を徙し五嶺を

成し、越の雜処に与」らしめた。ここで、流刑の範囲が西南からさらに遠くの東南の地へ到達する。同三十六年、東郡隕石事件のため、「河北榆中の三万家を遷」した⁽³⁵⁾。強制的な流刑のため、刑徒が逃亡する事例もあった。その大きな原因は、肉刑を受けて幸運にも死刑を免れた者も、故郷に止まることは不可能であったからである。

先に述べた通り、当初、刑罰の一つの顕著な特徴は永久的な痕跡を残すことであった。ゆえに『礼記』「王制」は「刑は、劓なり。成なり。一たび成めて変ふるべからず、故に君子心を尽くすなり」。顔師古はこれに注釈を加えて、「息謂は生長なり、言ふところは劓・刖・劓・割の徒、更に生長すべからず」と述べている。『漢書』「刑法志」は、「死は復た生するべからず、刑は復た属するべからず」と述べる。一度刑を受けると、終生不具になる。後世には、髡髪・剃須・囚人服を着ること・黒い頭巾を被ることなどと、刑は軽くなったものの、やはり同様の痕跡としての作用はあった。異なっているのは、肉体的な懲罰から、精神的な懲罰に変わったことである。このように肉体の器官を不具にすることから、心理的に辱めを加える懲罰に変わっても、その苦痛や恐怖感は肉体に与える苦痛に劣るものではなかった。そのため、公孫賈は商鞅から鯨刑を受けた後は、八年間家にこもって外出しなかったのである⁽³⁶⁾。

鯨刑の徒は流刑に処せられなかったとしても、衆人に醜い姿をさらす職に従事しなければならなかった。例えば「墨者守門」の類に

関して、受刑者は毎日衆人の蔑^{さげす}みの視線を浴び、同時に衆人はこれを見て戒めとしたのである。したがって、商鞅の法の中では、「千人にて環らし、睹諫して城下に黥劓せよ」とされた。人々に対しては一罰百戒、当人に対してはその身を辱めることが目的であったのである。

古人から見ると、受刑者は一般人とは別の階層に属し、人種を異にするものであった。したがって、路上で出会っても、刑徒に挨拶をすることはできなかった。ゆえに、『公羊伝』には「刑人は其人に非ざるなり、君子刑人に近よらず」と記している。『礼記』『王制』では、「人を市に刑するは、衆に棄てらる」とされた。受刑者は捨てられたゴミくずのように、もはや社会の構成員とは認められなかったのである。よって漢文帝の時、敬老法令を發布した際に、八十〜九十歳の老人は国家から布帛と酒肉を賜ったが、受刑者と犯罪人はこの対象から除かれた。⁽³⁷⁾『三国志』倭人条に言う「下戸大人と道路に相逢へば、逡巡して草に入る」と、『礼記』の言う「士途に遇へば、与に言はざるなり」とはほぼ同様であるが、倭人の下戸と中国の刑徒と比べると、その身分・地位はさらに低いようであり、「大人」と面と向かって会う勇氣もないのである。これは先祖が受刑者であったことの名残ではなからうか。

これのみならず、受刑者は宗教信仰の自由も奪われた。『周礼』『秋官』は、「凡そ国の大祭祀は、州里をして不^ふ蠲^{けん}・禁刑の者を除き、

任人及び凶服の者は以て郊野に及ぼさしむ。大師の大賓も亦た之の如し」とする。『太平御覧』は『風俗通』を引用して、「徒は墓に上らず。俗説に、新たに刑罪に遭ひ原解されし者、以て墓に上り祠祀すべからず、人をして死亡せしむとあり。謹みて『孝経』を案ずるに、身体髪膚は之を父母より受く。曾子病困なれど、手足を啓きて以て帰全するなり。今刑に遭ふ者、髡首剃髪して、身は笞を加へられ、狴^{へいかん}犴より析出すれば、臭穢にして不潔なり。凡そ祭祀は、孝子致齋して、馨香を貴ぶこと、親の存する時の如きなり。見子刑を被らば、心には惻愴有り。生に縁り死に事^{つか}ふるは、神明の不慮を恐る。当に墓に上らざるのみ」と評注を加えている。古代の祭祀は、人生で最も神聖にしておごそかな大行事であり、成年男女にとって最も重要なものであったが、受刑者にはこれに参加する資格がなく、その恥辱は覆い難いものであった。ここにおいて、受刑者はただ逃亡し、遠方へ行くより他になかったのである。

古い時代における流刑地の多くは北方にあった。北の方角は殷商時代には鬼方と認識され、伝説の鬼谷・鬼都は共に北方にあり、東北の方角もやはり万鬼出入の鬼門であり、西北の方角もまた鬼と縁のある場所であった。⁽³⁸⁾総じて言えば、北の方角は鬼と密接な関係があった。北を鬼方・鬼国とするのは、大体において北は夜が長く昼が短く、寒冷で不毛の土地であることと関係する。『山海経』などの書物には、北方は太陽が見えず、唯一の光は燭竜と呼ばれる神怪

の口にくわえた蠟燭から発せられるものであるとしている。これは、もしかすると北極地帯の白夜現象を指しているのかもしれない。⁽³⁹⁾ よって、舜が堯から天下を継承して支配した際、北方は広大過ぎるので、これを二つの州に分け、東を幽州、西を併州とした。⁽⁴⁰⁾ 陰陽五行説が登場すると、北方はすなわち黒とみなされ、水の特性をさらに規格化したものとなり、これが定説となった。中国古代の観念では、人は死ぬと土に帰り、死後、鬼に変わる。⁽⁴¹⁾ 地下はまた黄泉とも呼ばれ、暗い日の当たらない場所である。したがって、戦国・秦漢の絵画に見られる陰間（冥界）はまた、しばしば水と関係づけられている。同時に、季節の変化は、春は生を主とし、冬は死を主とするという自然現象との類推から、北方の寒冷地帯と冬とは同一で、万物が死ぬ場所とみなされた。そこで、北は容易に鬼国幽都・黄泉の郷と定められたのである。

文献の記載するところでは、殷人は鬼道に事え、東北の方角を尊び神明の居住地と考え、都城・家屋の配置において必ず東北の方角を重視した。⁽⁴²⁾ したがって、周が商を滅した時、殷人は東北方面に逃れ、このことから箕子^{きし}が朝鮮半島に遷居したという伝説が史書に記載されることとなったのである。⁽⁴³⁾

実際、商の人々が北の方角を崇拝したという習俗については、さらに古い時代にまでさかのぼることが可能である。新石器時代の黄河下流一帯に生活していた大汶口人（今から六千五百〜四千五百年

前）は、すでに北・東の方角を霊が去って行く最も良い場所としていた。今日までのところ、大汶口文化時代の墳墓が二千基ほど発掘されているが、そのうちすでに発表されている千八百余基の墳墓に関する資料を分析すると、大多数の被葬者はすべて頭を北方・東方または東方に向けて葬られており、西方・西南方に向けているものは少ない。このことは疑いなく、すでに新石器時代中期に、人々は北方・東方を理想の国と認識し、生きている時は行けないが、死後は行きたいと考えていたことを示している。⁽⁴⁴⁾ したがって、周人が東進し、大汶口人の未裔の民族である商民族を滅した後この習俗を継承し、北方は亡霊の王国であるとしたのである。よって、春秋戦国時代には江南の呉・楚・越が東北方の山東地方に向かって勢力を拡張したのみならず、人の死後の招魂の儀式も完全に中原の規則に則り、北方に向かって招魂したのである。

北方が亡霊の行く場所であったことから、秦漢の時代には、「滄海の中に、度朔^{どく}の山有り、上に大桃木有り、其れ三千里に屈蟠し、其枝間の東北を鬼門と曰ひ、万鬼出入する所なり」という伝説があった。⁽⁴⁵⁾ ただし、鬼の中には「悪害之鬼」というカテゴリーがあり、かつもっぱら悪鬼を捕らえる神人や、さらには悪鬼を捕らえる方法まで存在した。このことは、鬼に善悪の区別があり、同時に鬼の世界も安寧なものではありえなかったことを示している。凶鬼・悪鬼ともに東北の方角に住んでいるということは、囚人が東北方面に流

されたという事実を暗示していないだろうか。

『三国志』の記載によれば、三韓一带は「其俗綱紀少なく」「其人性強勇にして」「諸亡其中に逃げ至り、皆還らず、好みて賊を作す」ということである。また、「其れ北方の近郡諸国は礼俗に差曉せり。其れ遠処は直すら囚徒奴婢相聚ふが如し」とある。三韓よりもさらに遠い極北の地である「挹婁国」も同様に、「人多く勇力」で、しばしば「乗船して寇盜し、隣国之を患とす」るものであった。三韓およびその近隣国の髡頭文身の習俗については、江南人が「水難を避」けるためのそれとは異なる。

流刑あるいは逃亡して北方に行くということは、中原の人から見ると疑いなく死の道・黄泉の国に向かうことを意味し、鬼になることと何ら異ならない。流刑あるいは逃亡した罪人から見れば、この地ではもはや故郷に生還する機会はなく、もはや法律の束縛と道徳に苦しめられることもないことから、心のおもむくままに行動することができた。辺境の現地の住民の眼から見ると、突然醜惡な容貌で、恐ろしく凶惡無比な者がやってくれば、これが伝説の鬼族と思うことであろう。特に、これらの罪人の行動・生活習慣が現地の人と全く異なることから、畏敬の念すら持つに至るのである。

古代の肉刑の基準に照らせば、流刑あるいは逃亡した罪人はおそらく「五官刑」、すなわち黥・劓・剕などを受けた刑徒たちであろう。五官の欠損や変形によって、その正体が分からない人々は、鬼

と同様な、一般の人と異なる人たちであると容易に誤解されうる。

黥徒と鬼を関連づけるのは、以上の要素のほかに、鬼自体の特性からも証拠を見出すことができる。例えば、鬼が光を恐れ、人の大勢集まる場所に顔を出さず、暗黒の中で暮らすことを好み、自分自身黒い色をしているのに墨を恐れる心理状態は、墨で顔に黥を施されたことと関係がある可能性が極めて高い。鬼が人に祟りをなす時、しばしば虚弱で反抗能力のない病人・婦人・子供を選んで苦しみ、汚い不潔な所や荒れた土地で悪行をし、刀・剣などの武器、さらに官印・文人を見ただけで恐れる。このように弱い者を苦しめ強い者さらに官を恐れる心理は、まさに賊、特に小悪人の姿ではなからうか。このほかに、鬼が針・筆・小刀・墨などの小道具や文具を恐れるという特徴から見ると、これは明らかに黥刑を受けた心理的後遺症の反映である。特に興味深いのは、文字を恐れることである。⁽⁴⁶⁾

『淮南子』「本經訓」は、「昔者蒼頡書を作り、天粟を雨ふらし、鬼夜に哭す」と記している。天が穀物を降らせるということは、豊作のきざしである。鬼は何を恐れて泣くのだろうか。高誘は、「鬼文書の効する所となるを恐れ、故に夜哭すなり」と考えている。これは明らかに後世につくられた伝説であるが、同時に鬼がその後も引き続いて悪事を行い、あるいは以前の悪事に内心恐れを抱いており、悪事が露見するのを恐れているということであり、辺境に流された刑徒と関係がある可能性が高い。文書が届いたと聞いて、刑が加え

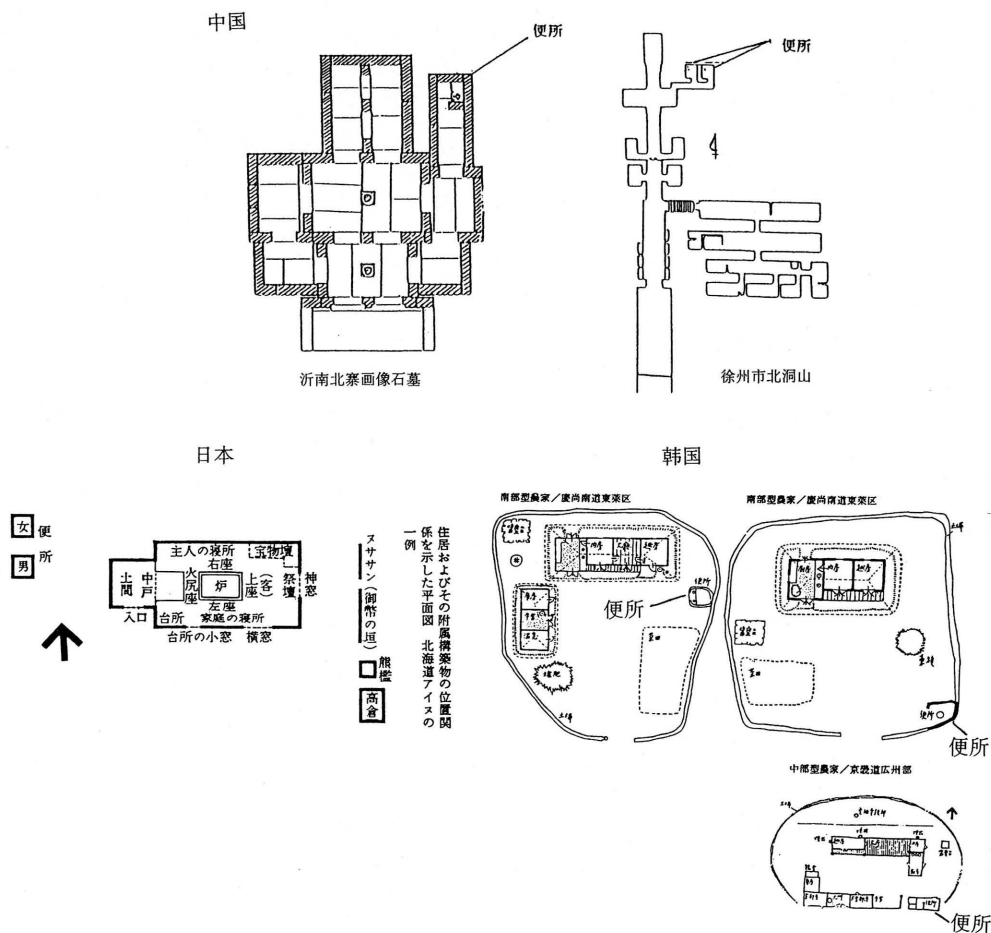
られると恐れ、また自分の正体が露見することを恐れるのである。ゆえに文字を使つたと聞いただけで、心配になり、恐くなって泣き出すのである。

堯舜のころより、『三国志』の記載するような、囚徒を東北方面および朝鮮半島へ流刑を行ったという文献の記載、または中国の鬼に関する伝説などに明白に東北方面に向かい、さらには「滄海之中」の「度朔山」へ流刑されたり、逃亡したりするというのが、一貫して黄河下流地方における第一の選択であり、「鬼」と呼ばれる者が実は流刑となった鯨面の徒であつたことを見てとることができ(47)。また、流刑され、あるいは逃亡して日本海の西岸に達し、日本に渡来している可能性がある。

鯨徒が日本列島に移住したという明確な文献上の記載はないが、鯨に關係する事象からその手がかりを探し出すことは可能であろう。さらに、鬼の問題を続けよう。鬼は全く変わり果てた醜い存在とみなされ、同時に不浄で汚れた所に住んでいるとみなされた。したがって、中国では祓いの儀式があり、日本にも同様に鬼に出会うのは不吉であり、必ず祓いをしなければならないという言い伝えがある。『古事記』の伊邪那岐命(いざなぎのみこと)が黄泉から逃げ出したのち、まづ行わなければならなかったのは、直ちに身の穢れを祓い落とす場所を探すことであつた。中国の祓いと異なっている点は、伊邪那岐命の祓いは川に飛び込み、水で穢れを洗い流したこと

である。この風俗は仏教の影響を受けたもので、若干後世になつてつくられた伝説であろう。実は、この水で行う祓いより更に古いものが、火による祓いである。中国北方で流行したシャーマニズムや今日でも見られる結婚の習俗では、一貫して火で祓いをする。シャーマンが祓いをする時は、必ずたき火をし、または屋内で薪を燃やす。中国北方では新婦が嫁入りする時には必ず火鉢・たき火・灰の上を跨がなければならないという習俗がある。これは、実は原始的な祓いの風俗の名残である。縄文前・中期にみられる大型の住居の中心に、一文字に広がった屋内のかまどが祓いと關係があつたかどうかという点については知ることができないが、火が魔除け・厄除けとなるというのは世界共通の考え方である。

中国の秦漢時代の穢れを祓うもう一つの方法は、便所を鬼魂の出入りする方角に作るというものである。穢れをもって穢れを治め、毒をもって毒を制するという觀念の現れである。特に、漢代の文献が初めて東北の方角を鬼門としてのち、漢代の墳墓では大多数は便所を東北の方角に置いて(48)。この習俗は、朝鮮半島および日本にまで影響を与えている。大陸とわずかに異なるところは、朝鮮半島の便所は多く東側に設けられることである。これは、あるいは鬼の觀念が黄河下流から東進して朝鮮半島に至つて以後、東北方向が日本海であるため、移り住む可能性があつた日本列島、すなわち朝鮮半島南部の東方に方角を改めたのではないであらうか。このほか、



図九 中日韓三国古代の便所の位置（黄曉芬『古代中国の墓制とその変遷』、泉靖一『住まいの原型』による）

さらに便所を東南に置く習俗もある。鬼門の方向は、疑いなく日本列島南端の九州一帯の方向を指している⁽⁴⁹⁾。これと同様に、朝鮮半島で新年に広く行われる「東桃枝」の習俗も、鬼を抑える方向を東方としている⁽⁵⁰⁾。何故、中国の度朔山という東北方向を鬼門としたことを改めて東としたのであろうか。これは、地理的環境の要素によるものであるかもしれない。黄河下流から東北方に向かつて進めば朝鮮半島を見出すことができるが、朝鮮半島から東北方に向かつて進めば、それははるか波の彼方の日本海であり、東あるいは東南の方角に行けば対馬などの島を経て日本列島に入ることができる。「鬼」たちは足場を得ることができたのであり、その伝承は全く根拠のないものではない。

しかし、日本の鬼には大陸の伝承と若干異なる所がある。日本列島の鬼は、島に住んでおり、西の方角に住んでいる。その祖先の住む方角については、中国や朝鮮半島と同様に東方であるが、祖先ではない鬼については、西の方角に住んでいるとしている。

日本のアイヌ人の習俗では、住居の配置において、祖先の祭壇を東に設けるだけでなく、家の中に設けており、東北の方角の宝物壇と密接に関連している。便所は室外の離れた西北方向に置き、さらに女便所は最も西北角に置く。その意味は、さらにはつきりと西北方向は鬼氣が最も強く、ここに最も汚れた女便所を置いて鬼氣を鎮めるということである⁽⁵¹⁾。

中国の便所は東北の方角にあり、万鬼が東北の方角から出入りするという伝承と完全に符合している。朝鮮半島の便所では、東あるいは東南の方向に変わっているのは、万鬼の出入口に変化が生じているのであり、日本列島では西北に変化している。この方向の変化は鬼の伝承と密接な関係があるはずで、同時に鯨の刑徒が移動したルートと関係している可能性が高い。刑徒たちが東北方面に流刑となった後、さらに東へ向かい、日本列島にまで達したのである。ゆえに、中国では鬼門は東北方向、朝鮮半島では東方、日本列島では明らかに西から来たと認識していた。東に行く、西から来る、これは移民と関係があり、移民を鬼とみなすことで、鯨徒との関係はより密接なものになる。

鬼と関連しているのが巫である。巫の起源はいつごろであろうか。明確な記載はないが、巫は恐らく火と関係があらう。殷商時代には少なからず「巫醜」という符号の青銅文字が出土しているが、朱芳圃はこれを「火塘」、すなわち新石器時代の「囲炉」とみなした。

この説は卓見である⁽⁵²⁾。『説文解字』の注釈による篆書体の「舜」の字は「舜」であり、すなわちまさにいろいろで踊っている姿であり、舜の故郷である山東では、舜に関する伝承は非常に巫に近い。例えば、火に焼かれても死なない、井戸に落ちても死なないなど、巫は超人としての能力を持っている⁽⁵³⁾。巫は何故、火と関係があるのだろうか。一つには火種を保存するためであり、二つには火に関する各種の巫術の儀式を行うからである。東アジアでは、マッチが発明されるまでは、火種を保存することは人間の血統を保持することと同様に重要なことであり、したがって相当に神聖なことであった。中国のことわざでは、家が断絶することを「断了香火」と言うが、これは祭祀が途絶えることである。

春秋時代、山東には長女は嫁がないという習俗があった。なぜ嫁がないのかといえば、一族の祭祀を守るためで、そのため長女は巫とも呼ばれた。『漢書』『地理志下』は、「始め桓公の兄襄公淫乱にて、姉妹嫁がず。是に於て國中の民家長女嫁ぐこと得さしめず。名づけて巫児と曰ひ、以て主祠と為す。嫁ぐ者其の家に利ならず、民今に至るまで以て俗と為す」と言っている。『公羊伝』『哀公六年』の何休注もまた、「斉俗、婦人祭祀を守る」と述べている。男性が家を取りしきる中国の封建社会にあって、特に孔子の思想の発生地である魯国の隣に位置した斉国にこのような習俗があることは、確かに驚くべきことである。『漢書』の記載では、この風習を斉襄

公に始まると推論しているが、おそらくそれよりさらに古いのではないだろうか。これは、中国東部の新石器時代の母系社会の名残である可能性が高い。かつこの風習の名残は、春秋戦国時代から今日に至るまでずっと残っており、「泰山老母」を民間では「姑姑」と呼んでいる。すなわち、これは嫁いでいない長女の意味である。

「泰山老母」の仕事は、山東一帯の民間信仰ではおよそ人間社会の一切を包摂している。長女は祭祀を守るほかに、さらに重要な仕事は家の火を守ることである。したがって、中国では竈の神は「おばあさん」と呼ばれている。

斉国の「長女嫁がず、巫児と名づけ、祭祀を守る」という習俗から、『三国志』の卑弥呼に関する記載を見ると、両者の関係はまさに瓜二つである。異なっているのは、斉の女性が家の祭祀を司るのに対し、卑弥呼が国家祭祀を司る点である。ここで連想されるのが、中国東北地方および朝鮮半島などの地のシャーマンが全て女性であるという風俗であり、中国東部の原始鬼信仰・崇拜と密接な関係があるというべきである。

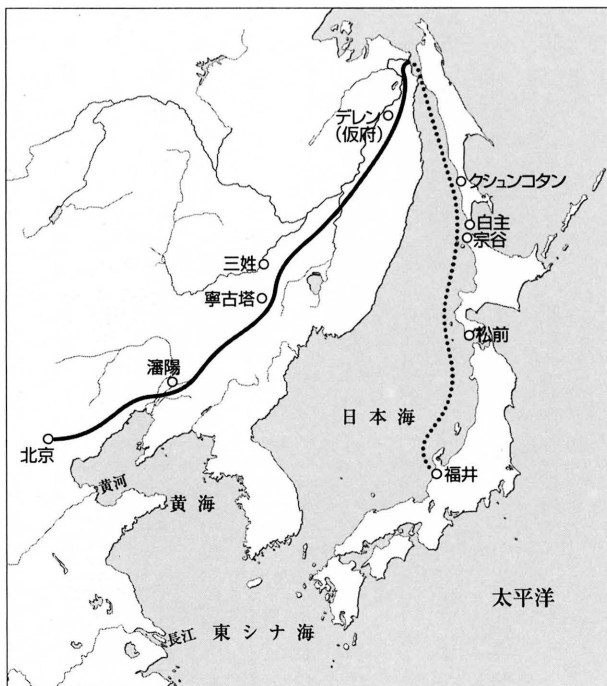
『三国志』は同時に、卑弥呼の死後、男性を立てて国王としたが、國中服せず、宗女の壺^{いよ}与を立てて、初めて國中が復^{ふた}び安定したと記している。この種の「女尊男卑」の習俗と、上に述べた長女が祭祀を守る遺風とは関係があり、また渡来人の女性に対する特別な渴望と関係がある。例えば、鰥面について記載する最も古い歴史物語で

ある『古事記』などに見られる久米の勇士は、なぜ各自目尻に入れ墨をしたのかというと、その目的は実は、ひたすら少女を求め、少女たちの歡心を買うためであった。須佐之男命（すさのおのみこと）がヤマタノオロチを退治したのも、同様にその少女を妻とするためであった。そのほかに、伊邪那美命（いざなみのみこと）が火の神を生んで陰部を焼かれた話、三輪の大物主神（おおものぬしのかみ）が少女に乗って便所に入った時、赤土を塗った矢じりと化して少女の陰部を突いたとの伝説など、女性に不足していた男性たちの性への渴望の現実を反映するものではないだろうか。『三国志』でこれを確かめると、「其の俗、国の大人皆四五婦あり、下戸或ひは二三婦、婦人淫ならず、妬嫉せず」という記述がある。当時、女性が不足していたわけではないことが見てとれるが、ではなぜ伝説中の神々はこのように性に飢えていたのであろうか。このことは別の側面から、『古事記』の神々がその実、外来のものであったことを証明しているのではないであらうか。神と鬼とは厳密な区別はないので、このような争うことしか知らず、女のことしか考えない神々とは、古い時代の渡来人の姿である可能性が高い。

辺境に流刑され、さらに遠方に逃亡して移り住み、鰥徒が日本列島に移住したという推測が可能であり、かつ日本列島の縄文時代の土偶、特に鰥面形式の土偶の様々な具体的な形式と中国古代の鰥などの刑罰の記述がしばしば符合し、これに加えて鰥に関連する社会

風俗が残っていることなどから、刑徒たちが日本列島に渡って来たという史実は基本的に確認できる。

鯨面が文明の中心では刑罰であり、辺境の地では装飾の風俗となっているのはなぜであろうか。この点については、秦漢時代に既に疑問を抱いていた人々がいる。例えば、『周礼』『秋官』の鄭玄注は、「今東西の夷、或ひは墨鯨を以て俗と為す、古の刑人亡逃する者世に類するか」と言っている。賈公彦は疏文で、鄭玄の疑問を更に一歩進めて明確な解釈を行っている。「墨鯨の人、亡逃して夷に向か



図十 (福井県立博物館編集・発行『中国浙江省の文物展』による)

ひ、詐りて中国の人皆墨鯨を俗と為すと云ひ、夷人、亦た之を相襲と為し改めず、故に墨鯨を俗と為すと云ふなり」。すなわち、刑徒たちは辺境に逃げ、文明の中心地では人々はすべて入れ墨をしていると偽り、信用した辺境の民族はこれを学んで、よって入れ墨の風俗が辺境に広まったというのである。

辺境土着の人々は、なぜ刑余の逃亡者の虚言を信じたのであろうか。それは、主として古代は交通が未発達で、情報がスムーズに伝達されないからであり、それゆえに文明の中心地に鯨彫の陋習があり、交通の往来が頻繁になると、鯨彫の習俗の真の姿が理解されるようになり、その結果この種の陋習が一つずつ衰退していくのである。これは鯨徒が中国東北地方および朝鮮半島、その後日本列島に達し、日本列島で鯨面文身の習俗が広く行われた主たる原因でもあるかもしれない。海に隔てられていること、および日本の地理的環境の影響によって、鯨面の習俗は最初東北・関東地方に発生し、特に山間部で発達したが、相当長い期間この習俗が続いたのは、日本列島における古代交通の未発達・交流の不活発さと関係があらう。またこのような環境は、自分の真の身分が露見することを恐れる刑徒たちにとっては、当然ながら最も有利であった。

鯨面の刑徒が、日本に渡来したルートについて考察したい。第一のルートは直接山東半島から東北および北海道南端に達するルートで、その証拠としては新石器時代の抜歯があげられる。日本に

おける抜歯の起源は、まさに鯨面土偶の起源と時間的に対応しており、かつその分布地域も大筋一致しており、この種の符合は極めて意味のあることではないであろうか。⁽⁵⁴⁾ 第二のルートは、黒竜江下流から海を越え樺太に至ったのち、北海道に南下し、さらに南下して東北地方に至るものである。その理由は、『三国志』に見られるように、黒竜江下流は刑徒・奴婢が住む地域であり、その風俗はしばしば船に乗り盗みをはたらくというもので、海を渡って日本列島に達していた可能性は高い(図十)。第三のルートは朝鮮半島から対馬海峡を越えたのち、さらに北上して北陸および関東・東北地方に至るものである。傍証の資料としては、『古事記』の海鳥に関する伝説がある。日本武尊(やまとたけるのみこと)の魂が八尋の白鳥と化して飛び去ったのち、后妃と皇子たちは海辺まで追って、歌を作った。

「海処いけば 腰なづむ 大河原の 植ゑ草 海処は いさよふ

とうたひたまひき。又飛びて其の磯に居る時、歌曰ひたまはく、

浜つ千鳥 浜よ行かず 磯伝ふ

とうたひたまひき。⁽⁵⁵⁾

これは、まさに漂流して海を渡った史実の反映である。その伝説が記録されたのは、後世のことであるかもしれないが、その起源はそれほど新しいものではないようである。磯浜に沿って前進すると

いうのは、日本海の海岸の様子を想起させる。

このほか、嫁入りの際に火を跨ぐ風俗の考証をした江守五夫によると、関東・東北地方で最も広く行われた特徴は、中国東北地方および朝鮮半島の風俗と完全に同一である。⁽⁵⁶⁾ 加えて、粉食の習慣・麦や緑豆の栽培・瓢箪の伝説など、中国の地方文化が日本の北方へ入り、最も古い移民が北方から日本に入ったということは、およそ当然の理と考えられる。以上の三通りの渡来ルートは推測であり、文献上の証拠はない。考古学上の資料が不足していることから、民俗学上の調査結果を入手できれば、さらに多くの実証資料が見つかるかもしれない。

6 鯨と渡来文化

列島の原始文化は、一万年近くに及ぶ土器時代は縄文中期に至って、ついに質的な飛躍が発生した。縄文文化の輝かしい時代はここに発展し、繁栄を始めたのである。

まず、住居の変化があげられる。第一には、住居面積の拡大である。前期と比較すると、中期の集落の中には、面積が百平方メートルにも及ぶ、大きな家屋が出現した。このように大きな家屋は、人口がこの時期増加したことを示しており、同時にまた、間接的ながら原始社会の生活に大きな変化が発生したことを反映している。この時期、すでに権力階級が発生していた可能性が高く、かつ集落住

民の集合の場が屋外から屋内に移ったことは、集合する時間がさらに長くなったことを示しており、あるいは集落の安全を脅かす要素が出現したのかもしれない。山間部における脅威とは、おそらく強奪であつたのではなからうか。沿海部一帯は、山間部に比べて生活資源がより豊富であるとはいえ、何故大型の建築物を海辺に設置したのであろうか。外敵の侵入があつたのではないだろうか。もし、外敵が土着の人々であつたなら、明らかにこのような対応は不要であつただろう。恐らく、侵入者が土着の人間と比較してさらに凶悪であつたため、大量の土偶が壊されて地下に埋められるという現象が生じたのであろう。ここに反映されているのは、集団的な敵に対する呪詛と恐怖である。

第二には、炉の変化である。屋外の炉と屋内の灰の痕跡は、疑いなく比較的古い時代の火の使用の習俗である。屋外から屋内への移動、すなわち意識的に土製の火鉢や石囲炉で火種を保存したことは、さらに火の使用が通常のこととなり、かつ食物に火を通して食べる生活習慣が一段と普及したであろうことを示している。縄文人が突然飲食の習慣を変えたのは、やはり外来民族の影響であろう。なぜなら、今日に至るまで日本および沿海の東夷民族は、全で一貫して生食の習俗を有しているからである。

第三には、住居の形式の変化である。住居の出入口が前に延びている建築様式は、黄河流域と完全に同じであり、その影響を受けた

可能性があるのではないだろうか。さらに、住居の地面に石を敷く現象は、この時代の人々が既に地面に坐することに慣れておらず、あまり湿気の多い地面の上に居住するのには適応していなかったことを示している。これは、気候の変動なのであろうか、あるいは民族の変化なのであろうか。数値の上からは五千〜四千年前の気候は温暖になっていた。そうであるとすれば、生活習俗の変化の要因は、異なる民族の存在と関係しているとは言えないのではないか。

また、土器にも変化が生じた。世界各地の土器の起源と発展は、全て簡素なものから複雑なものへと規則的に変化しているが、縄文中期以降の装飾紋様の鬼は多種多様で、実に殷商の紋様と本質的に同じであり、かつ黒陶で精密に作つた壺などの新しい様式の器は、中国の竜山文化の形式に近い。

台付器（豆形器）の出現は、画期的な現象であつた。壺形土器と異なり、台付器は蒸したり煮たりすることができず、液体を盛ることも貯蔵することもできず、ただ可能であるのは上に食物を載せて見た目を良くするだけである。ゆえに、中国では供物を盛るのに用いることが多く、春秋戦国時代には身分・文明のシンボルとなった。特に、黄河下流地方では、とりわけ「豆」の使用が好まれた。大汶口文化から竜山・岳石文化に至るまで、陶豆はそれぞれの時代の土器の中で重要なものであつた。そのため、後世の人々は殷商の遺民の箕子が朝鮮半島に移住したことを記述した際に、いかにして豆を

東アジアの風習的抜歯分布 1 (紀元前4300年～3500年)

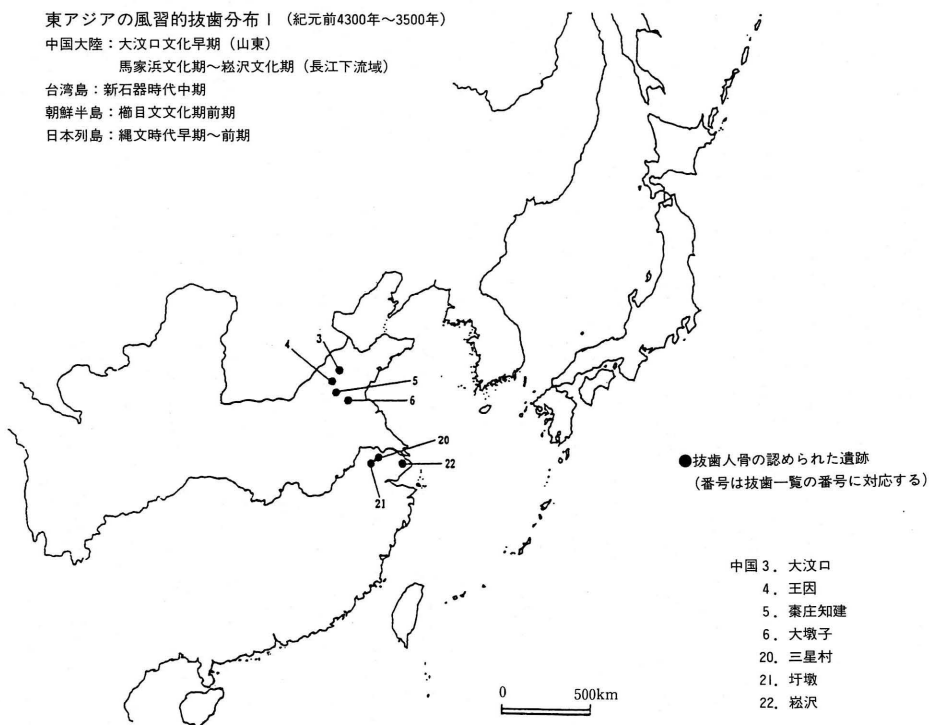
中国大陸：大汶口文化早期 (山東)

馬家浜文化期～崧沢文化期 (長江下流域)

台湾島：新石器時代中期

朝鮮半島：櫛目文文化期前期

日本列島：縄文時代早期～前期



東アジアの風習的抜歯分布 2 (紀元前3500年～2000年)

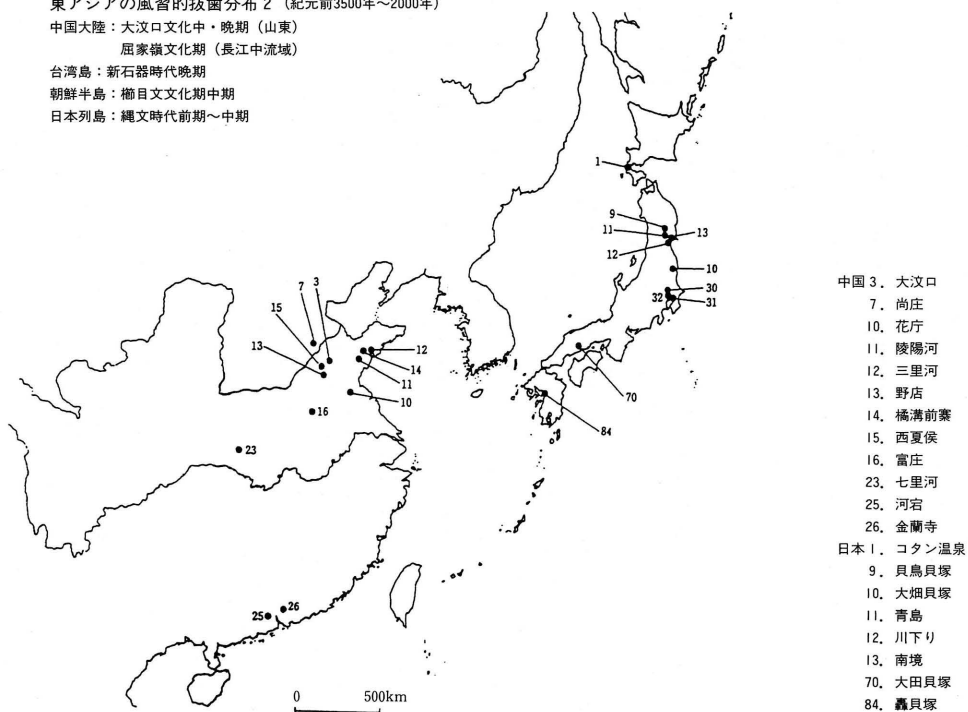
中国大陸：大汶口文化中・晩期 (山東)

屈家嶺文化期 (長江中流域)

台湾島：新石器時代晩期

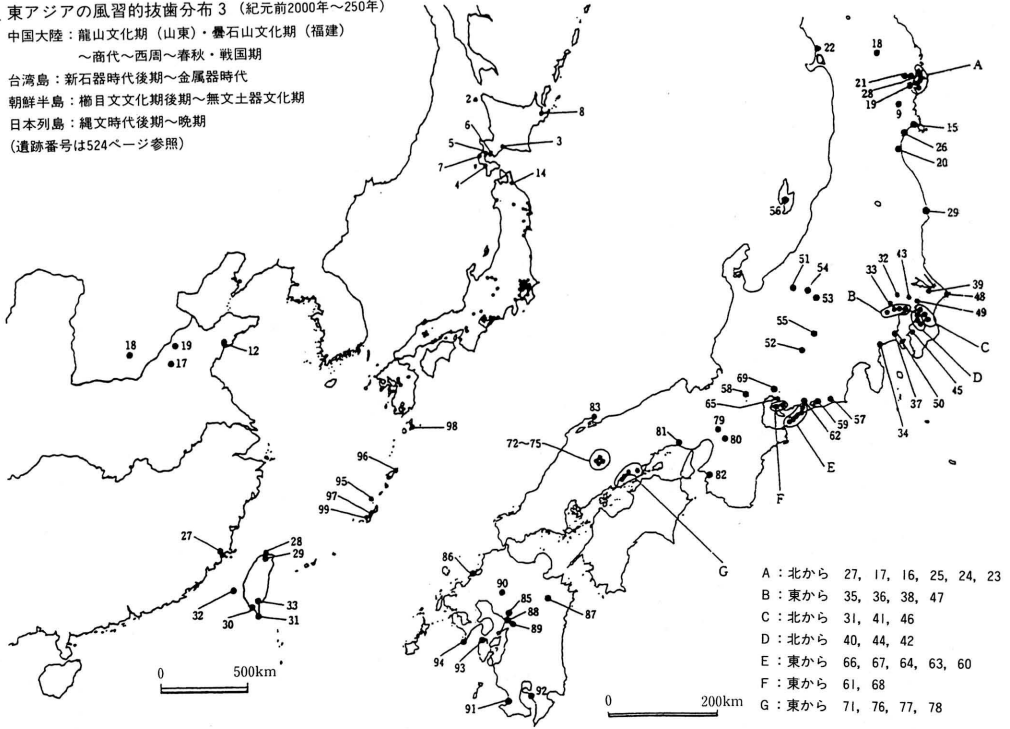
朝鮮半島：櫛目文文化期中期

日本列島：縄文時代前期～中期

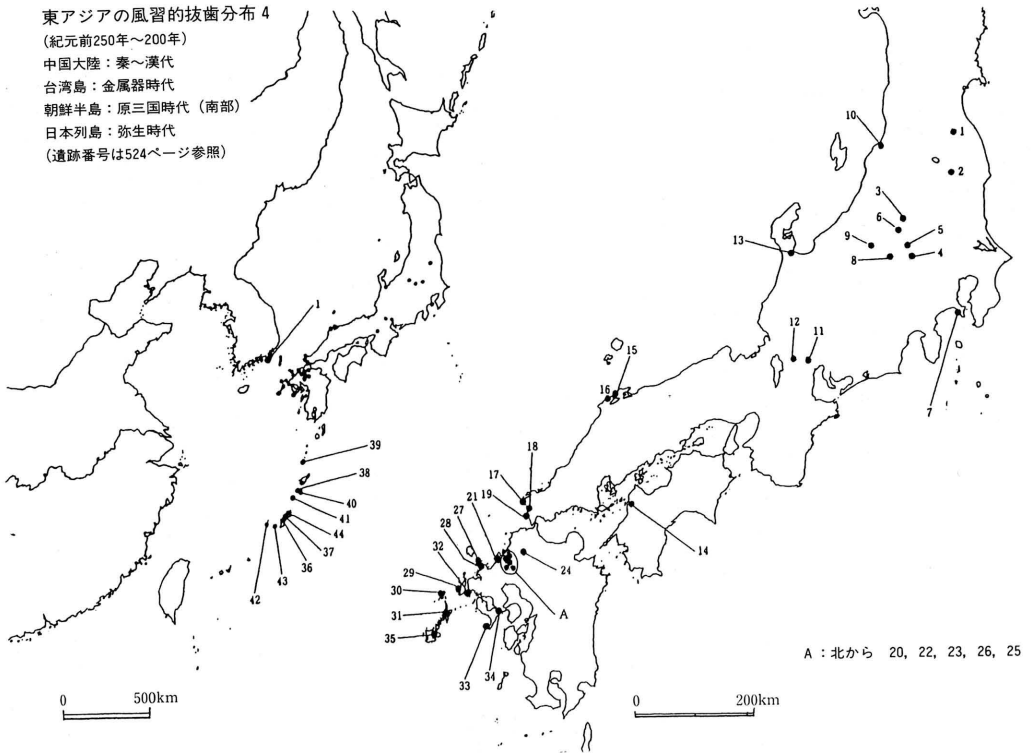


図十一の一 東アジアの風習としての抜歯分布(木下尚子「東アジアにおける風習的抜歯の基礎的研究(資料編)」による)

東アジアの風習的抜歯分布 3 (紀元前2000年～250年)
 中国大陸：龍山文化期（山東）・曇石山文化期（福建）
 ～商代～西周～春秋・戦国期
 台湾島：新石器時代後期～金属器時代
 朝鮮半島：櫛目文文化期後期～無文土器文化期
 日本列島：縄文時代後期～晩期
 (遺跡番号は524ページ参照)



東アジアの風習的抜歯分布 4
 (紀元前250年～200年)
 中国大陸：秦～漢代
 台湾島：金属器時代
 朝鮮半島：原三国時代（南部）
 日本列島：弥生時代
 (遺跡番号は524ページ参照)



図十一の二 図十一の一に同じ

用いて食事をする習慣を育んだのかということについて特に指摘し、かつ挾婁国の人が食事に籩豆へんとうを使用しないということを、善からざること・例外的なことを考えている。倭国を含む東夷部族は、全て基本的に俎豆そとうあるいは籩豆へんとうを使って飲食することが習慣になっていたので、「豆」の類の器物を用いるか否かということが、すでに文化・民族・習俗を区別する基準になっていたのである。同時に、「豆」により飲食の方式が変化したのみならず、その土地の祭祀の形式に相応して「豆」に変化が生じた可能性が高い。孔子は幼いころ、俎豆の礼を学ぶこと、すなわち俎豆によって祭祀を行う礼儀を好んだ。黄河下流域における俎豆の重視は、礼の思想を東方で時代の要請として生み出し、周辺の地域に影響を与えた。日本列島に出現した台付器すなわち高坏は、大陸文化と密接な関係があったと推論できる。

第三には、抜歯と葬俗である。春成秀爾と木下尚子の研究の結果、東アジアでは抜歯の風俗は、最も古くは黄河下流の大汶口文化・長江下流の馬家浜文化・松沢文化に至る地域に発生した。大汶口文化の中晩期に至り、山東地方の抜歯の風習は西南部から東北部の山東半島一帯に移り、長江下流では突然消失し、福建省の閩江一帯に現れた。この時期、日本の北海道と関東地方には、突然抜歯の風習が発達してきた。年代的には、この時期は縄文前期の中・後葉から縄文中期にかけての時代である(図十二)。竜山文化の時代に至ると、

山東地方にはまだその風習が残存していたが、すでに勢いは失われ、日本列島では北から南へ、また福建・台湾方面から沖縄を北上して九州へ達し、関東・東北地方では優勢を占めていた。秦漢時代には、黄河流域と長江中下流域では、抜歯の風習はすでに跡形もなく衰退していた。しかし、当時日本列島では本州南端から九州一帯で、極めて盛んであった。それぞれの地域の抜歯の方式は全く同じではなく、ある地域では上を抜歯し、ある地域では下を、ある地域では上下というように異なっていたが、全体的な状況は大体同じで、実質的には全く同一のものであった。何のために、このような習俗が行われたのかについては、病気除けと関係があるとする説、黥面と同一であるとする説、種族のシンボルであるとする説など様々である。しかも中国の商代には、抜歯は刑罰の一種として実施された。甲骨文に見られるように、「齒」扁に旁として「辛」を付けた文字は、金属器の鑿で歯を削り除いたことを反映している可能性があり、後世の金文・篆書などでは、全て金属の武器で削り除いたことになっている。このことは、抜歯が本来黥面と同様に、一種の懲罰であったことを暗示していないだろうか。大汶口時代の人々は、獐ぞうの歯を副葬することを好んだ。⁽⁵⁷⁾ 歯を抜かれた獐は、牙を抜かれた猪と同様に従順になり、人に脅威を与えるおそれなくなる。そうであれば、獐のように歯を抜かれた人もまた、高慢不遜でありうるだろうか。周知の通り、動物は大きなものは虎や豹のような猛獣、小さなもの

のは犬猫のような家畜にいたるまで、しばしば口を広げて歯をむき出しにするのは、自分が恐れている時か、相手を威嚇する時である。商周の彫刻および紋様によく見られる「饕餮」などの、眼をむいて口を広げ歯を露出した表現形式は、大体において人を威嚇するためである。しばしば誇張した顔・口をもって装飾するのは、人を威嚇するためであることは一目瞭然である。このような口を開け人を呑み込む形をした青銅器については、口を開け歯を露出することの真の目的をさらにはっきりした形で示している。ある学者は、金文によく見られる、口が一つだけ、あるいは頭が口一つになった文字符号は一種の仮面であり、別の角度から歯を露出することに悪の含意があることを証明している。

ゆえに、金文に見られる「齒」扁に旁として「辛」を付けた文字は、鑿で歯を削り除く様子を表しており、明らかに懲罰と関係がある。とくに、犬歯を抜き取るのは、動物の牙を抜き取るのと同様、その攻撃性・邪悪さを取り除く重要な手段である。よって、大汶口時代の人々はしばしば獐の歯を副葬したが、それは抜き取った歯にも悪の意が同様にあると考えたからである。すなわち、抜歯は鯨と同様に、永久的な印を残す方式として、一種の古い刑罰であった可能性が高い。

口に対する懲罰は、時に眼に対する懲罰よりも意図的である。例えば、舌をそぐ、舌を刺す、歯を抜くなどの方法によって、自由に

食事を摂れなくする、食事を楽しくないものにする、食事をまずくする、咀嚼を難しくする、飲み込むのを難しくする、流暢に話せなくする、あるいは全く話す能力を奪い啞にするものなどである。後には、口の部分に罰を加えるために、鋭利な道具で口を刺したり、歯を引き抜いたり、さらに最もよく見られる頬を打つなどに変化した。ある時点からそれ以前のことを考えると、その時点の習俗は大部分が古代から続いてきたものであるので、歯を抜き取るという現象も、口に対する刑罰と密接な関係があるはずである。

時期的な側面から見ると、中国大陸の抜歯は日本列島より早く、その抜歯の形式も上あごの歯、中でも左右の側歯を抜き取るのを主とする。北海道では片方の側歯を抜き、東北地方では下あごの左右の犬歯を抜き。中部・西日本地方では上あごの犬歯とともに下あごの門歯を抜くが、その形式は竜山時代の三里河の抜歯に近い。大陸と日本の抜歯は、完全に同一であるという確証はないが、大汶口時代の上あごの左右の側歯を抜くという方式と、北海道の一方の側歯を抜くという形式の間に全く関係がないとは言えないであろう。

我々は現在のところ、大汶口時代の人々の抜歯方法が、一本先に抜くのか、二本の歯を一度に抜くのかなど、知るよしもない。もし、鯨刑の方式が初犯が両眼、再犯が両頬、三犯がその下の横線であるのと同様に、歯を一本だけ抜くのであれば、一本抜くのも二本抜くのも本質的には異ならない。側歯から犬歯への転化については、眼

をつぶして盲にすることから目の周囲の皮膚に入れ墨をすることへの転化と類似しており、犬歯の働きが側歯より劣り、かつ犬歯の形が動物の牙に似ていることから、犬歯を抜くことで懲罰の目的が達せられ、かつ正常な咀嚼や飲食に何の妨げもない以上、抜歯が広まったころには人々は容易に犬歯を抜き取るという方法を受け入れることができたのである。

また墓葬の習俗について、東アジアにおける甕棺葬は黄河流域の産物である。これは、幼児の葬送から発展し成人の葬送となったもので、後世に至ってさらに変化して骨を入れ、骨灰を保存する容器となったものである。日本で発見されているものと黄河流域の甕棺はほとんど完全に同一であり、古くは縄文前期後葉に青森県の蟹沢遺跡で発見されたものも幼児の棺であった。中期以降、北から南に伝わり、子供から成人に至る葬送まで遍く行われた。弥生時代に至ると、身分・地位の比較的高い人にも甕棺が使用され始め、この形式が日本列島の住民に広く受け入れられたことが見てとれる。かつその開始年代は明らかに黄河流域より遅く、これは黄河流域の葬俗の影響ではなからうか。

第四には、宗教・信仰の変化である。縄文中期以降、生産・生活上で実際には意味のない石棒・石剣・石冠などの器物が相次いで現れ、集石遺跡の規模がますます大型化し、集落の広場にも集会用の大建築があるだけでなく、大型の祭祀坑もあり、意識的に破壊し

た大量の土偶を坑内に埋めるという様式は、疑いなくこの時期に宗教意識が濃厚になり、宗教活動が活発になったことを示している。

土偶の小型化、懸垂式土偶の大型化の進展、土偶を破壊して集葬する様式を見ると、これはあるいは中国大陆で極めて広く行われた「盟誓」の際の呪詛の結果であるかもしれない。滋賀秀三の考証によれば、中国の最も古い刑罰は「盟誓」に起源を有する⁽⁵⁸⁾。もし同じ民族の構成員が規則に違反し、あるいは他の民族集団に打撃・報復を与える必要がある時は、必ず全ての構成員が集合し、罪状をあげつらい、刑罰の程度について議論し、こぞってこれを盟するのである。もし、該当者がその場にいれば当然厳罰は逃れない。いない場合、他の物品をもってこれに換え、鶏を殺し、牛を捌き、犬を屠^{ほぶ}り、あるいはその人間の形をした人形に罰を与える。中国の民間には、今でもなお木・紙・面などを用いて人を呪う習俗があるが、これは古い盟誓の様式が残存したものである。異なっているのは、公開の盟誓から秘密の呪詛に変化したことである。この習俗は、日本列島でも同様に伝わっている。盟誓から次第に規範化し、そこから種々の儀式が誕生し、最終的には巫の出現、原始宗教の誕生に至ったのである。中国東北地方や朝鮮半島などにおけるシャーマンの習俗は、実際公衆の前で厄（病気）を除く一種の儀式である。異なっている点は、盟誓ではその場にいる人々に参加するように呼びかけて厄除けをするのに対し、シャーマンたちは神の力によって病を除く

ことであり、方法は異なるが目的は同一であり、起源も同一なのである。

悪霊に対する恐怖と崇拝は、醜悪な顔の土偶に限られるものではなく、熊や狼の牙の飾り、および蛇形・蛇紋の装飾土器などが、中期以来徐々に盛んとなった。縄文人はもしかすると、凶悪な動物の鋭い歯、あるいは凶悪な動物で実用土器を装飾すれば、必ず悪を以て悪を治め、護身・魔除けになると信じていたのではないだろうか。

7 結 語

中日両国の鯨面の刑罰と入れ墨文物に関する考察を通じて、日本の縄文中期以来発生した入れ墨の風俗が、実は中国大陆の文化の影響とかなり大きな関連性があることが判明した。中国の鯨・劓などの刑徒が日本列島に逃亡してのち、自らの姿と列島土着の住民の生活様式が異なることから、在地の住民は不可思議なものとしてこれを崇敬し、自らの装飾として取り入れ、ついにこれが習俗となった可能性が高い。中国の流刑地域の特徴から、鯨徒の日本列島への進入ルートは北から東へ、あるいは朝鮮半島から海を渡って西日本の沿海一帯、あるいは樺太から南下して津軽海峡の両岸に集中したはずである。稲作農耕を主たる特徴とする弥生系の渡来人と異なり、鯨徒らが将来した文化には色濃く北方黄河流域の特徴を備えており、特に亡命としての性格を濃厚に有している。逃亡生活のため、外界

との過度の接触はあえて持たず、閉鎖的な文化と心情のため、鯨徒たちが渡来してから永い年月が経過し、記憶がわずかに残る黄河文化の要素を除いては、縄文時代晩期に大陸のさらに進んだ文明の要素を意識的に学習し導入するということは少なかった。このことが、東日本地方の縄文文化が続いた時期が西日本地方に比べて長く、最終的に東西日本の文化・習俗などにならかなり大きな差異を生み出した。これは、鯨徒の文化が日本列島に残した負の遺産と言えるかもしれない。

本論文の作成にあたっては、千田稔先生の他、岡部孝道、竹中康彦、竹下弘美、佐々木甫、王克非、渡辺昌宏の各先生の御協力を得たことを深く感謝します。論文中の挿絵については、設楽博己、木下尚子、春成秀爾の各氏より引用いたしました。ここに深く感謝いたします。

注

- (1) 和佐野喜久生編集・発行『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』、一九九五年。
- (2) 戸沢充則編『縄文時代研究事典』東京堂出版、一九九四年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集「土偶とその情報」、一九九二年。
- (3) 高山純『縄文人の入墨』講談社、一九六九年。

(4) 『漢書』地理志下には、「(越人) 文身斷髮するは、以て蛟竜の害を避く」とあり、その応劭注には「(越人) 常に水中に在り、故に其の髪を断つ。其の身を文るに、竜子を像るを以てす。故に傷害に見はざるなり」という。『淮南子』原道篇には、「九疑の南、陸事寡くして水事衆し。是に民人断髮文身を賛へ、以て鱗虫を像る」とあり、その高誘注は、「文身、画を其の内に刻み、墨を其の中に内れる。蛟竜の状を為すは、水に入るを以て、蛟竜害せざるなり。故に鱗虫を像ると曰ふなり」とする。『淮南子』泰族篇の許慎注には、「越人箴を以て皮を刺し竜文と為すは、尊榮を為す所以なり」とある。『說苑』奉使篇には、諸発曰く「彼の越(中略)海垂の際に処し、外藩に屏け以て居と為して、蛟竜又我と争ふ。是を以て剪髮文身し、爛然として章を成し、以て竜子を像るは、將に水神を避くるべきなり」とある。『後漢書』西南夷伝には、「(哀牢) 種人皆画を其の身に刻み、竜文を像する」とある。

(5) 杜佑『通典』卷13、刑法一、刑制上、中華書局、一九八八年。

(6) 前掲注(5) 書。

(7) 沈從文・王矜『中国古代の服飾研究(増補版)』京都書院、一九九五年。

(8) 田昌五・石興邦主編『中国原始文化論集』文物出版社、一九八九年、樂豊実『東夷考古』山東大学出版社、一九九六年、高広仁「山東史前考古的几个新課題」(『考古学季刊』甲種第22号『中国考古学論叢』科学出版社、一九九五年)。

(9) 李肖冰『中国西域民俗服飾研究』新疆人民出版社、一九八五年。

(10) 許成・衛忠『賀蘭山岩画』文物出版社、一九九三年。

(11) 康殷『古文字形發微』文物出版社、一九九三年。

(12) 『商子』境内(台湾商務印書館影印『四部叢刊』018)。

(13) 『史記』2(古典研究会叢書・漢籍之部 第二期、18) 卷六、秦始皇本紀第六、汲古書院、一九九六年。

(14) 段成式『酉陽雜俎』中華書局、一九八一年。

(15) 杜佑『通典』卷164、刑法二、中華書局、一九八八年。

(16) 『中国大百科全書・法学』中国大百科全書出版社、一九八四年。

(17) 前掲注(5) 書。

(18) 前掲注(11) 書。

(19) 前掲注(7) 書。

(20) 前掲注(14) 書。

(21) 前掲注(16) 書。

(22) 前掲注(11) 書。

(23) 『漢書』刑法志(『台湾商務印書館影印本二十四史』、一九六六年)。

(24) 前掲注(11) 書。

(25) 前掲注(14) 書。

(26) 『季刊考古学』第30号(特集「縄文土偶の世界」、設楽博己「線刻人面土器とその周辺」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集、一九九〇年)、「割青史の研究」(江馬務著作集第四卷『装身と化粧』中央公論社、一九八八年)。

(27) 水野祐『評訳魏志倭人伝』雄山閣出版、一九九三年、相賀徹夫編『日本大百科全書・2』小学館、一九八五年。

(28) 『儀礼』(台湾商務印書館影印『四部叢刊』001) にみられる「士

- 冠礼」「士婚礼」「郷飲礼」「郷射礼」などには、すべて「尊兩壺」「有玄酒」が記載されている。「士冠礼」には「玄酒、新水也。」とあるが、これはすなわち日本の「若水」であろう。高崇文「楚器使用礼考」(『楚文化研究論文集』第四集、河南人民出版社、一九九四年)参照。また、中国北方では今でも水を酒として、墓で祭祀を行う習俗を残している。
- (29) 『中国地方誌民俗資料匯編・東北卷』書目文献出版社、一九八九年。
- (30) 『周礼』礼官・司刑(台湾商務印書館影印『四部叢刊』001)。
- (31) 『尚書』大伝には、「古の刑を用ひるは、像を画きて犯さず。蓋し上刑は赭衣不純、中刑は雜履、下刑は墨蒙にて、州里に居すを以て人之を恥づ」とある。
- (32) 前掲注(16)書。
- (33) 貴州省『畢節県誌稿』(『中国地方誌民俗資料匯編・西南卷(下)』書目文献出版社、一九九一年)には、「巫は朱墨を以て面を塗り、靈官を像る。雷部各神、戸に沿ひて搜捕し、以て瘟疫を祓ふ」とある。
- (34) 『史記』卷46、田敬完世家(『台湾商務印書館影印二十四史』、一九六六年)。
- (35) 前掲注(13)書。
- (36) 『史記』卷68、商君列伝第八(『台湾商務印書館影印二十四史』、一九六六年)。
- (37) 『前漢書』卷四、文帝紀第四(『影印四庫全書』台湾商務印書館)。
- (38) 『山海經』海外北經には、「鬼国武負の尸北に在り」とある(袁珂校注『山海經校注』上海古籍出版社、一九八〇年)。「論衡」訂鬼篇(台湾商務印書館影印『四部叢刊』022)。
- (39) 陳鈞『中国神話新編』漓江出版社、一九九三年。
- (40) 『禹貢』(『叢書集成統編219・史地類』新文豐出版公司)。
- (41) 『礼記』祭義(台湾商務印書館影印『四部叢刊』001)、許慎『説文解字』(台湾商務印書館影印『四部叢刊』004)。
- (42) 楊錫璋『殷人尊東北方位』(『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』文物出版社、一九八九年)。
- (43) 『朝鮮史略・卷之一』(『四部叢刊広編』台湾商務印書館)。
- (44) 高広仁『大汶口文化的葬俗』(田昌五・石興邦主編『中国原始文化論文集』文物出版社、一九八九年)。
- (45) 前掲注(38)『山海經』。
- (46) 徐華龍『中国鬼文化』上海文芸出版社、一九九一年。
- (47) 馮時『殷卜辭四方風研究』(『考古學報』一九九四年第2期)は、「北方風の名、卜辭役に作る」とする。『説文解字』には、「役、辺を成るなり」、「呂氏春秋」有始には、「北方寒風と曰く」とある。
- (48) 黄曉芬『古代中国の墓制とその変遷』附図(国際日本文化研究センター共同研究(千田班)第8回研究会資料)、一九九七年。
- (49) 泉靖一『住まいの原型』鹿島研究所出版会、一九七一年。
- (50) 萩原秀三郎・崔仁鶴『韓国の民俗』第一法規出版、一九七四年。
- (51) 前掲注(49)書。
- (52) 朱芳圃『殷周文字積叢』中華書局、一九六二年。
- (53) 袁珂『中国古代神話』中華書局、一九六〇年。

(54) 木下尚子「東アジアにおける風習的抜歯の基礎的研究(資料編)」(『先史学・考古学論究Ⅱ 熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集』)、一九九七年。

(55) 荻原浅男校注・訳『古事記(完訳日本の古典 1)』小学館、一九八三年。

(56) 江守五夫「家族慣習の角度から」(『北方文化と日本列島』クバプロ、一九九六年)。

(57) 前掲注(8)書。

(58) 滋賀秀三「中国上古刑罰考―以盟誓為綫索」『日本学者研究中国史論著選訳』中華書局、一九九三年。

参考文献

1 日本考古学協会編『日本考古学辞典』東京堂出版、一九六二年。

2 『岩波講座日本考古学』第4巻「集落と祭祀」、岩波書店、一九八六年。

3 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版社、一九九六年。

4 『日本民族・文化の生成』I(永井昌文教授退官記念論文集)六興出版、一九八八年。

5 金関恕・佐原眞『弥生文化の研究8 祭と墓と装い』雄山閣、一九八七年。

6 小林達雄編『日本原始美術大系1 縄文土器』講談社、一九七七年。

7 小林達雄・小川忠博編『縄文土器大観』小学館、一九八九年。

8 永峰光一・水野正好編『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』講談社、一九七七年。

9 日本第四紀学会・小野昭・春成秀爾・小田静夫編『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会、一九九二年。

10 第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『アジアの古代文明を探る・歴史と水の流れ』クバプロ、一九九五年。

11 第10回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『北方文化と日本列島』クバプロ、一九九六年。

12 森浩一『図説日本の古代1―海を渡った人々―』中央公論社、一九八九年。

13 斎藤忠『東アジア葬・墓制の研究』第一書房、一九八七年。

14 『日本歴史地図 原始・古代編上』柏書房、一九八二年。

15 金廷鶴編『韓国の考古学』河出書房新社、一九七二年。

16 小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学』六興出版、一九九一年。

17 林麗娥『先秦考古学考』台湾商務印書館、一九九二年。

18 周作人訳『古事記』国際文化出版公司、一九九〇年。

19 袁珂校注『山海經校注』上海古籍出版社、一九八〇年。

20 山東省地方史誌編纂委員会編『山東省誌・民俗誌』山東人民出版社、一九九六年。

21 張光直『中国青銅時代』聯經出版事業公司、一九九四年。

22 艾蘭・江濤訳『亀之謎―商代神話・祭祀・芸術和宇宙観研究』四川人民出版社、一九九二年。

23 馬昌儀編『中国神話学文論選萃』中国廣播電視出版社、一九九四

年。

- 24 蘇秉琦主編『考古學文化論集（四）』文物出版社、一九九七年。
- 25 王迅『東夷文化与淮夷文化研究』北京大学出版社、一九九四年。
- 26 姜彬主編『稻作文化与江南民俗』上海文芸出版社、一九九六年。
- 27 呂大吉ほか主編『中国各民族原始宗教資料集成・考古卷』中国社会科学出版社、一九九六年。
- 28 劉俊文主編『日本學者研究中国史論著選訳』中華書局、一九九三年。